資　料

パ　　リ
―― 誕生から現代まで ――
［XXV］

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典*　訳注

第 2 帝政[1)]

12 月 2 日

クー・デタは，アウステルリッツ会戦[2)]記念日の 1851 年 12 月 2 日に起った。その前日，親王大統領の歯科医だったアメリカ人エヴァンズは，彼が「秘密の重圧から逃れたい欲求を感じている人間のような物思いにふけった様子」をしていた，と語っている。「マリ，今夜は私のことを思ってくれたまえ」と，彼はチュイルリ宮で開催されたレセプションの席で，いとこのハミルトン公夫人[3)]に手を差し出しながら言った。クー・デタは，オルタンス女王[4)]の私生児モルニー[5)]が主謀者だった。ブルボン宮は第 42 連隊により包囲される。雨にうたれながら白いビラを読んだ一人の共和主義者が，次のような悲痛な絶叫を発した。「我々は破れた！　私の心臓が私にその敗北を叫び，私はそれを実感している！　私の目が私に敗北を告げている！…　共和政は死んだのだ！」

そのため，ティエールは拘束され追放される。パリは自衛の準備をする。カルチエ・ラタンでは，学生委員会が街路を維持する。フォーブール・サン‐タントワーヌの聖マルグリットのバリケードで，数人の同僚と決起した人たちを激励に来た代議士ジャン・ボーダ

* 福岡大学名誉教授

ン[6] を一人の労働者がからかった。代議士たちが支給される日給が 25 フランなので，彼らは「25 フラン」と呼ばれていたのである。「25 フランのためどんな風に死ぬか見せてやろう」とその時ボーダンはやり返した。そして，バリケードの上に仁王立ちになり，彼は撃ち倒される。しかし，間もなく，武力の前に後退しなければならなくなる。最後のバリケード，モントルグイユ街[7] とプティ‐カロ街[8] のバリケードから帰ったジュール・ヴァレス[9] は絶望していた。「私は戻った，と彼は書いている，頭はぼんやりし，心臓には穴があき，木槌で打ちのめされて屠殺場の湯気の立つ血潮の中に倒れ込む牛のようによろめきながら」

12 月 5 日，モルニーは満足していた。全てが終った。自由派の市民の一斉検挙が行われる[10]。ルイ‐ナポレオンは煽動政治家としてフランス全土を旅行した後，人民選挙に訴える。7 百萬以上の多数の「賛成」oui が彼を皇帝に選出する[11]。コメディー‐フランセーズでアルセーヌ・ウセー[12] が彼の勝利を祝うのだが，皇帝についてイギリスの旅行客は「細い縮れていない髪」で，「太く厚い茶色の口髭」，「鷲鼻」，「灰色がかった青い瞳はむしろ小さくて細長く切れた目」をしていた，と描写している。もっと後になって，コンコルド広場での観兵式の時，一人のパリ市民が「ロマネスクな一種の満足感で一杯になり，ほとんどアラブ風といってよい微笑を浮かべ，目の白い所が両頬の蒼白い白さと区別できない」皇帝を目撃する事になる。ある夕べ，チュイルリ宮で，オーストリー大使ヒューブナー伯爵[13] は彼が客を迎えようとしているのを見るのだが，その時現れたのがジェームズ・ロートシルドに付き添われたモンティホ嬢[14] だったのである。「その舞踊会で，結婚宣言が行われた，と言ってよかろう。」

1853 年 6 月 29 日，ナポレオン 3 世ガウージェニー皇后をチュイルリ宮で迎えた時，彼は陸軍中将の制服に身を固めていた。白い半ズボン，ピカピカに磨き上げられた長靴，金羊毛勲章の頸飾りをつけ，若く痩身で，ワックスで固めた髭，こめかみまで巻き毛をたらしたヘアスタイル。ノートル‐ダムでは，結婚のために 15.000 本の蝋燭が点火された。

ウージェニー皇后の部屋は，オルロージュ館[15] とフロール館の間の庭に面した 2 階だった。皇帝はその下の階に住んでいた。皇后の部屋には，青い燕尾服と白い半ズボンを着用した侍従に導かれて入室する。幾つものサロンを通り抜けると，女友達に取り囲まれ，低い椅子に座っている皇后に会える。彼女はすらりとしており，少し灰色がかった金髪で，彼女の瓜実顔の輪廓を引き立てる中央から左右に分けた髪をこめかみに垂していた。弓形の蛾眉，広い額，両眼の間は狭く，首はしっかりすわり，撫で肩の胸部，中高の喉をもつ

彼女が身をくねらせ服の裾を少し折り曲げる時，その物腰は威厳があった。

ルイ‐ナポレオンはロンドンでミス・ハワード[16]の援助を受けていた。（彼はシルク街[17]の彼女によく会いに行っていて，後に彼女にボールガール城館を与えている）。
最初の頃のこの愛人の後に数人の愛人ができる。しかし何よりも御贔屓は，ラ・スペッジア出身のイタリヤ女性「美しきニキア」la belle Nicchia と呼ばれたカスティリョオーネ伯爵夫人[18]だった。彼女は夫の伯爵を破産させた後で離婚していた。ヴィットリーリョ‐エマニュエレ国王[19]は，皇帝にイタリヤ救援を決心させる使命を帯びさせて彼女をフランスに派遣したのである。彼女がパリに出発する前，カヴール[20]が彼女に言った。「成功してくれたまえ，私のいとこよ，あなたの気に入った方法で成功してくれたまえ，ともかく成功してくれたまえ。」彼女は成功しチュイルリ宮で輝いていた。彼女は鏡に映る自分を見詰めて自分を賛美しており，人呼んで「意中の貴婦人」dame des cœurs という半ルイ 15 世風，半当世風の衣裳で皇帝を迎えていた。それは下着のペチコートの上から裾を折り返したスカートを穿き，大きなハートの形に鎖を交叉させたコルサージュを着て，髪は項に滝のように流していた。彼女は美しい瞳，小さな口，魅力的な喉と肩，完璧な形をした腕を持っていた。1860 年以降，彼女は皇帝と皇后の間に夫婦喧嘩を惹起させたため，パリを去らねばならなかった。

宮廷で萬事を取り仕切っているのはモルニーで，彼はシャン‐ゼリゼにある一種の四角な別棟で小さな屋形のような建物に住んでいた。無神論者で浮気者で不正投機師ですらあったが，しかし常に上品な物腰を保ち，皇帝の先見の明のある支持者だった。彼は女性たちの花園の中に身を置く事を好んでいたが，それら女性たちの中で「可愛いいブス」jolie laide ことメッテルニヒ公女[21]が輝いていた。これらの貴婦人たちは蜜蜂の舞踏会（1863 年 2 月 9 日）に華々しく登場する。園丁たちがチュイルリ宮の嵌木細工の床の上を押してきた金色の藁で製作した巣箱に入り，そこから彼女たちが出た時の服装は，花飾りをつけたスカートが輪骨入りペチコートで大きく広がるものだった。「チュイルリ宮の舞踏会に出席するため，私はパリで 36 時間過しました，とフロベール[22]はジョルジュ・サンドに書いている。掛値無しに，素晴らしいものでした。」

フォーブール・サン‐ジェルマンでは，ラ・ロシュフーユー[23]，ユゼ[24]，ヴォグイェ[25]，ブラカ[26]，リュイーヌ[27]，ポッツォ・ディ・ボルゴ[28]，デュシャテル[29]など，いずれも 40 萬から 60 萬フランの年金を受ける人たちの邸宅が沢山な金をかけて維持されていた。それらの屋敷は，天井が高く，中庭と庭園を持ち，広い階段があり，多くの召使を抱えてい

た。それらの所有者のうちのある人たち，モレ家[30]，ブロイ家[31]，ノアイユ家[32]，モンタランベール家[33]は政治に参加している。青年たちはジェズイットの所で，乙女たちはオワゾーの所で育てられた[34]。女性，貴婦人は自分の面会日を持ち，ボワに行きまたコンサートに行き，2輪車の上に身を乗り出し，「自転車乗り」vélocipédeuse になる。男性はサークルやジョッキー・クラブ[35]によく通い，狩りに行き，金儲けのために働く。

リトグラフと水彩画で，エコル街[36]生れウジェーヌ・ラミガミ[37]が輝かしい宮廷や，肩や背中を露わにした女性たちを描いた。彼女たちは微妙に色のかわる服を着て，あたかもミュッセの喜劇から抜けでたようだった。これらの「美しき美女たち」belles beautés が宮殿の金と銅の装飾の中，重いシャンデリヤの下の大階段を登り降りしている姿や，羽根飾りをつけた帽子を被り手に扇子を持ち，バルコニーの手摺の上から身を乗り出している彼女らをラミは描いている。

オスマン男爵[38]

皇帝は（かって貧困の絶滅のための本を出版しなかっただろうか？[39]），労働者の福祉を増進し，より多くの衛生施設を提供し，労働者を熱中させる暴動の煽動者を抑制しようと欲した。そのため，彼はセーヌ県知事オスマンに広範な権力と数百萬フランの資金を与えた。1852年，リヴォリ街が開通する。するとヴィクトール・ユゴーは次のように皮肉る。

「直進！　これが現在の秩序の言葉だ。
直線により決闘で刺し貫かれたパリは
15本か20本の通り全体を貫通して全てを受容する…
この古いパリはもはや永遠の通りに過ぎず
Ｉの字の如く優雅に美しく延伸される，
《リヴォリ！　リヴォリ！　リヴォリ！》と叫びながら」

オスマンは不人気だった。奴は誇大妄想家さ，と人々は噂した。彼の大通りは余りにも費用がかかり誇張された着想のようにみえた。「オスマンの途方もない空想的予算」comptes fantastiques d'Haussman が話題になる。勿論，人々は盛大に取り壊し工事をした。古いパリの幾つかの聖域が根こそぎにされる。ニコラ・フラメル[40]の住宅，クリュニー学院[41]やジャコバン修道院[42]の残っていた建物，古いサン－ブノワ教会[43]，イノサン

市場[44] などである。

通風も照明もよりよくしようとして，街路を開通して剃刀で切ったようにパリを 2 分した人物（彼は交通の未来について先見の明はなかった）は，しかしながらマキシム・デュ・カン[45] のような支持者を持っていたのである。1868 年にカンは書いている。「魔法の杖の一振りで，20 年前の 2 月革命の頃に見たパリに突然戻ったとしよう。そうしたら恐怖の叫び声があがるだろう。パリ市民のような自惚れの強い人たちはそのような掃きだめで生活できたのだと，誰もが理解できないだろう。」エトワール広場[46] の凱旋門[47] の周辺を台無しにしていた不潔な小路は姿を消した事は言っておかねばなるまい。この都市はより公開され秩序立てられた計画に沿って，広い通りや街路と共に再建されたのである。下水道[48]が，1863 年のコレラ[49] の後で掘られる。これに加えて，記念建造物の建設が開始される。建築家ヴィスコンティ[50] とルフュエル[51] によりルーヴル宮はチュイルリ宮に更に見事に連結される。

サン‐トーギュスタン[52]，ラ・トリニテ[53]，サント‐クロティルド[54]，ノートル‐ダム‐デ‐シャン[55]，サン‐ピエール・ド・モンルージュ[56] などの新しい教会が出現する。中央市場，アルコル橋[57]，ノートル‐ダム橋，両替橋，サン‐ミシェル橋[58]，アンヴァリッド橋[59] が建設され，ガルニエ[60] の作品である新オペラ座の工事が始まった。

これらの装飾の他にも，パリは要塞群までの城壁内の市町村を吸収合併して成長する。1845 年以来，この要塞群の中にパリを閉じこめ，ティエールはこの都市を窒息させていたのである[61]。オートゥーユ，パッシー，バティニョル‐モンソー，モンマルトル，ラ・シャペル，ラ・ヴィレット，ベルヴィル，シャロンとベルシー，ヴォージラール，グルネル，ブーローニュの森が併合される。

オスマンは自分の仕事が人々から賞賛され，「偉大なる男爵」Grand Baron と呼ばれた時，次のように言うのが常だった。「これらすべてを私に指示して下さったのは皇帝陛下です。私は陛下の協力者に過ぎません」と。

大銀行の創立，工業の繁栄，年金生活者の恵まれた地位は，労働問題を提起せずにはおかなかった。サラリーマン層を体制側につけるため，皇帝は孤児院，療養所，前貸貸付け金庫を創設する。しかしプロレタリアートの復権要求は，他国におけると同様フランスにおいても益々激化して行く。1864 年の法令[62] により，ストライキは暴力を行使しなければ公認される。労働組合が認可された同じ年，フランスにその起源をもつ国際労働者協会[63]　——　この会議にデゲテールとポティーエール[64] がやがてその歌となる「インター

ナショナル」*l'International* を与えることになる　――　がロンドンで開催される。

しかし，ナポレオン 3 世の治世の終わり頃，社会主義の穏健派とプルードン[65] と共に国家社会主義に反対していた人たちは，カール・マルクス[66] の暴力的な弟子たちによって包囲されてしまう。かくしてストライキは軍隊との流血の衝突に至るのである。

クー・デタから誕生した第 2 帝政はその邪悪な起源を忘却させる事は出来ないだろう。独裁者のための主権の譲位という起源を。1848 年に再結集した社会各層は再び対立し分裂する。首都の発展のため実施した積極的な作業やこの首都に払った大いなる配慮にもかかわらず，ナポレオンは多くの地点から脅かされているのを感じた。今まで見てきたように，革命精神を保有している労働者階級により，小売商人たちの反乱により，そして最後に指導者階級により。独裁的帝政から自由主義的帝政に移行したにもかかわらず，ブロイ公[67] のサロンの常連や，正統王朝主義の支持者で偉大なる弁護士ベリエ[68] の周囲に集まる青年たちは自分たちの警句に手加減をすることはなかった。

「貴方が悲しみ郷愁を抱いている，と聞いていますが，とボードレールはジャージー島へ亡命しているヴィクトール・ユゴー[69] に書いている。それは多分まちがいでしょうね。しかしもしそれが本当だとしたら，貴方を完全に癒すために，私たちの悲しいパリ，この退屈なパリ - ニー・ヨークに一日いれば充分でしょう。」ボードレール彼自身は反対だった。彼の『悪の華』*Les Fleurs du mal*[70] の幾篇かが断罪されたのではなかったか？　彼はアドルフ・ティエールまで含めて，精神の独立と写実主義の支持者全員を持っていた。ティエールは，再選前の 1862 年に，自著『総督政治と帝国の歴史』*Histoire du Consulat et l'Empire* の最終の言葉に次のように書いた。「一人の男に決して身を任せるべきではないし，自分の自由を決して譲渡すべきではない。」

この自由は広範囲に侵害されていなかったろうか？「コルセール」*Le Corsaire*[71] 紙は逮捕され，「プレス」*La Presse* 紙[72] と「シャリヴァリ」*Le Charivari* 誌は懲戒されなかったろうか？　不安で復讐を絶叫している君主を暗殺する権利を議論したという理由で，フランス・ロマン主義演劇の傑作『ロレンザッチョ』*Lorenzaccio*[73] の台詞をカットしなかっただろうか？

徐々に，パリはナポレオン 3 世に反対して立ち上がる。選挙が第 2 帝政に対する敵意を明示する。イタリヤへの援助とメキシコ介入の後，プロシャに対する無分別な宣戦布告，スダンでの降服，あるイギリス人が「最後のナポレオン」Napoléon le Dernies と呼んだ人物の瘓位宣言と続く[74]。

しかしながら，オスマンのパリは現代の表情の前のこの都市の最後の現実の表情である。それ以来，首都の発展は，不幸にもなされなかったが，郊外の彼方まで拡大する新しい都市の創造以外の未来を持っことができたとは思われない。1870 年秋（9.5.），亡命から帰国したヴィクトール・ユゴーがパリの変貌に一驚した時，これが自分が賞賛した「小人ナポレオン」Napoléon le Petit[75] の仕業だ，と確信したのである。

『レ・ミゼラブル』*Les Misérables* の作者の想像力から拍車をつけた長靴を履いて出現したこの「バダンゲ」,「夜盗」,「お化け」について，後になってゾラがその肖像を修正するだろう。「高貴な夢想にとりつかれた勇敢な男で，と彼は語っている。邪悪な行動はできない人さ。」かくてこの「鉄色のペンキで塗られた葦」roseau peint en fer に対し人間性と明敏さと偉大さのある種の評価を認めることになるだろう。

（続く）

パ　　リ
—— 誕生から現代まで ——
（訳　注　XXV）

1）Le Second Empire：ナポレオン 3 世の帝政。前半の専制帝政期（1852-67）と後半の自由帝政期（1867-70）に分けられる。1852 年憲法は理論的には民主主義的だったが，実質的には皇帝の独裁を許した。50 年はフランスにおける産業革命の完成期で，皇帝は保護政策により，金融，産業などの近代化を促進した。労働者のスト権などは認めなかったが福祉施設の充実に務めた。2 度の万国博覧会の開催（1855，57）はフランスの繁栄を示す帝政の成果である。アフリカやアジアの海外植民地獲得も一応の成功を得て、おそまきながら帝国主義的膨張策も実行された。しかしイタリヤの国家統一のため決起したサルディニア王カルロ・アルベルトらの独立戦争が第 1 回目は失敗したにも不拘（1848-49），第 2 回目の決起にあたり，フランスはこれに介入し，独立派を援助しオーストリーと戦った。しかしこの介入は中途半端のままフランス単独でオーストリーと講和し，独立派を見棄る愚行に終って，皇帝の権威に不信と軽蔑を与えてしまう。またイギリスとの通商条約の失敗，メキシ出兵の敗北からマキシミリアン皇帝を見殺しにする破目に陥り，帝政の基盤を揺るがす。これから後は自由を要求する朝野の声に押し切られる形で，議会制度や社会改善などの自由主義的改革に譲歩していった。ビスマルクの挑発に乗ってほとんど準備もないままプロシャに宣戦布告した時，ルイ－ナポレオンの第 2 帝政は屈辱的敗北の中に崩壊した。近代的兵器で完全武装し開戦に備えて緻密な作戦計画を立案していたプロシャ軍に対し，フランス軍はほとんどなす所なく完敗，皇帝自身がスダンで捕虜となりフランスは降伏し（1871.9.2.），18 年続いた第 2 帝政は終った。こうしてドイツのヨーロッパにおける覇権が確立したのである。

2）Austerliz の会戦：現在は Slavkov と呼ばれるチェコのモラヴィア地方の町で Littava 川に臨む。1805 年 12 月 2 日，ナポレオン皇帝指揮のフランス軍が，アレクサンドル 1 世のロシヤ軍とフランツ 2 世のオーストリー軍の連合軍を破り，軍旗 50 本以上，ロシヤ軍の将軍 20 名余，捕虜 3 萬人を得た大勝利を収めた。冬の季節にも不拘，早朝から太陽が輝きナポレオンの勝利を祝したようだった，と伝えられている。3 人の皇帝が戦火をまじえたこの戦いは 3 帝会戦と呼ばれるようになる。以後 12 月 2 日は愛国的フランス人の戦勝祝賀記念日となった。

3）duchesse de Hamilton：イギリスの名門貴族 William-Anthony-Archibald-Hamilton-Douglas,duc de Hamilton（1811-1843）と，1843 年に結婚した la princesse Marie de Bade を指す。親仏的だったバーデン大公 Charles-Louis-Frédéric（1786-1818）に対し，ナポレオンは妻のジョゼフィーヌ皇后の従妹で自分の養女にしたステファニー Stéphanie Tascher de la Pagerie を嫁に世話した。バーデン大公の皇女マリはおそらくこのステファニーの孫ではないかと推定される。夫ハミルトン公もフランスの宮廷で過ごし，帝政崩壊後イギリスに帰国，貴族院議員になったが，重要な政治的仕事はしていない。

4）Hortense de Beauharnais（1783-1837）：大革命の時に反革命分子として処刑されたボーアルネ将軍（1760-1794）を父とし，ナポレオンと再婚して皇后となったジョゼフィーヌ（1763-1814）を母として生れた。ナポレオンの弟ルイ（1778-1846）と結婚（1802），ルイが兄ナポレオンによりオランダ国王に任ぜらたので，彼女もオランダ王妃になった（1806）。夫との間に 3 人の男子を儲けるが，このうちの 3 男のみが生存して後のナポレオン 3 世になる。ナポレオンから強制された結婚だったので結婚生活は二人にとって不幸だった。大陸封鎖令に臣下たちのために反対したルイは，1810 年にオランダ国王を退位，サン - ルー伯爵を名乗ってフィレンツェに引退し著述に専念した。オルタンスは夫の譲位を機に離婚，パリに帰京し華やかなサロンを開き，社交界のスターになり浮名を流した。情人の 1 人，タレイランとフラオ公爵夫人の間にできたオーギュスト・フラオド・ラ・ビラルドリエ子爵（1785-1870）と交際し，後のモルニ―公爵となるシャルル・オーギュスト・ルイ・ジョゼフを産む（1811.10.23.）。離婚後僅か 1 年しかたっていない。こういう訳でモルニーはルイ - ナポレオンと異父弟の間柄になる。第 1 次王政復古の時シャルル 18 世は彼女にサン - ルー公爵位を送った。第 2 次王政復古後はスイスに引退し，アレーネンベルクの居城で歿した（1837.10.5.）。

5）Charles August Louis Joseph, duc de Morny（1811-1865）：オルタンス元王妃とフラオ将軍の私生兒だったのでオーギュスト・ド モルニーなる人物によって戸籍に登記されたため，モルニーを名乗るようになる。前述した如く，父方からみればタレイランの孫，母方からみればナポレオン 3 世の異父弟にあたる。アルジェリアで数年間軍務についた後に帰国（1838），社交生活を楽しむ傍ら，長年にわたる交際相手のベルギー大使夫人の援助に依り実業界に進出，フランス中南部ピュイ・ド・ドーム県の県都クレルモン - フェランの近郊で精糖工場を経営し成功した。1842 年の選挙で同県選出の代議士となった。

当時はオルレアン派だった彼は議会の多数派である保守勢力により自分の経済的能力を認めさせ，同時に女性と馬と社交生活と投機に熱中した。1849 年 5 月の立法議会に再選されてから，異父兄ルイ - ナポレオンの無二の忠臣となり，彼の皇帝即位の野望実現のため努力，内相として 12 月 2 日のクー・デタの綿密な計画を立案実行した。オルレアン王家の財産没収案に反対して辞任（1852.1.），立法院に入り 1854 年から死ぬまで議長を務めた。ロシア駐在大使となり，サンクト - ペテルフブルグに滞在中（1856-57）ロシヤの名門貴族の令嬢 la princesse Troubetskoi と結婚するが，享楽的生活は止まらなかった。第 2 帝政後半の自由主義風潮に乗じて彼は実業家として活躍し，鉄道建設，鉱山経営などで巨利を手にする。保養地としてドーヴィルを開発し，オッヘンバックのオペレッタの共同興業主になったりしている。彼はメキシコで銀行や鉱山を経営している銀行家 Jean-Baptiste Jecker（1810-1871）と組んでメキシコ政府発行の国債売買で利益を得ようとした。所が償還差益などの有利な條項が，新任のメキシコ大統領 Benito Pablo Juarez（1806-1872）により否認され，その上にこの改新派の新大統領は内戦（1858-61）の出費を国債と外債の利子支払いを停止して賄おうとした。更に彼は資本に対して税金の前倒し徴収を決定したのである。この措置はモルニーにとっても巨額な損害を与える事になる。彼はメキシコ外債を所有している政府を使嗾しメキシコ遠征を決意させた。ルイ - ナポレオンが遠征軍派遣を決断したのは，彼の夢であるラテン帝国の創設やニカラグア政府が要請している運河建設の実現のためでもあったが，モルニーの懇願も動機の一つであった。同時に遠征軍を送ったイギリスとスペインはファレス大統領と協定を結び（1862.1.），早々と軍を撤退させたが，フランスのみはこの協定を不満として戦争を維續する。これもこの協定の内容に不満なモルニーの拒絶のためで，彼の私利を守るため，フランスはメキシコ人のゲリラとの泥沼の戦いに引きずりこまれるのである。第 2 帝政実現の功績者はかくてその滅亡にも手を貸したのである。しかしモルニーはこの後も皇帝の庇護の下に蓄財に励み臣萬の富を手中にし，また立法院議長として政界に君臨，1862 年には公爵に敍さられ，帝国の没落を見ることなく 1865 年 3 月 10 日安らかに死んだのである。

6 ）Jean-Baptiste Alphonse Victor Baudin（1811-1851）：医者だった彼は，1849 年の立法議会選挙で当選，極左の代議士としてルイ - ナポレオンのイタリヤ遠征に強硬に反対した。また大衆のため無料の義務教育制度の設立を提案している，12 月 2 日のクー・デタの日，これに反対するため労働者街のフォーブール・サン - タントワーヌ地区のサント - マルグリット街に行き，決起を呼びかけた。しかし彼の呼び掛けに労働者たちは冷淡

で，貴方の日当 25 フランのために死ねないぞと野次られたのである。「25 フランのためにどのように死ぬか，諸君に見せてやろう！」と彼は呼び，バリケードの上に仁王立ちになり，直後に政府軍兵士により射殺された（12.3.）。彼のこの行為が賞賛され伝説化されるのは，1868 年 11 月 14 日のガンベッタの声涙俱に下る追悼演説による。共和派の新聞 *L'Avenir national* と *Le Rêveil* がボーダンの記念碑建立のキャンペーンを展開しそれを政府が後援した時である。

7）rue Montorgueil：第 1 区と第 2 区を通り，モンマルトル街とレオポール‐ベラン街を結ぶ長さ 360 米，幅 8 米から 11 米の道。幾つかの小道が統合され，1792 年から 1830 年にかけて完成した。13 世紀以来多く小道があったが，終点が mont Orgueilleux になっていたので，この丘の名が町名になった。この街の一部であった「アルトワ伯爵夫人」la Comtesse-d'Artois 街の建物 3 階に御用金収納役グルドンなる男と結婚したマルグリット・ストックが娼館を経営，その娼婦の一人 Lange 嬢という源氏名の娘が後のバリ伯爵夫人としてルイ 15 世の愛妾になった。また 66 番地の中庭の奥の建物で大盗ラルスネルと共犯アヴリルが集金係を殺しているが（1834.12.31.），彼は 14 日にも第 3 区のサン‐マルタン街 321 番地の passage du Cheval-Rouge（赤馬小路）で未亡人のシャルドンとその息子を殺害している。モントルグイュ街 62 番地のバリケードの上で，12 月 2 日のクー・デタに反対したガストン・デュスーブなる人物が，1851 年 12 月 3 日に射殺されている。

8）rue du Petit-Carreau：この名は 1714 年から 1860 年頃まででで，現在は第 2 区の rue des Petits-Carreaux となっている。サン‐ソヴール街とクレリ街を結ぶ長さ 228 米，最狭幅 12 米の道。この道はモントルグイユ，ポワソニエールなどの道と共に北海で獲れた魚をパリに運ぶ沼に沿った旧道の一部だった。

9）Jules Vallès（1832-1885）：フランスのジャーナリスト，小説家，社会主義者，中部フランスのル・ピュイ‐アン‐ヴレー生れ。父は貧しい小学校教師，母は還俗した修道女だった。愛情の無い少年時代を過ごし，18 歳の時にエコル・ノルマル入学のため上京したが，このエリート校の雰囲気に馴染めず，進歩的思想の学生たちと交友し，カルチエ・ラタンでボヘミヤンの生活を送った。ルイ‐ナポレオンのクー・デタに反撃しようとして失敗，心配した父に故郷に呼び戻されて精神病院に監禁された（1851-52）。ほとぼりがさめ再び上京，パリ大学法学部を卒業し代用教員，パリ市職員，新聞記者などをして生計をたてながら，株屋の悪徳を皮肉った小説『金』*L'Argent*（1857）やボヘミヤンなどを描いた『反抗者』*Les Réfractaires*（1866）を出版する。この作品はミュルジェールが感傷

的で甘美な青春生活のボヘミヤンを描いたのに対し，貧困に苦悩する悲惨なボヘミヤンの現実を描いている。彼は「リベルテ」紙や「フィガロ」に論稿を寄せいたが，その内容は益々過激になり，現政府の横暴と支配階級の堕落を痛烈に批判し，プロレタリヤ階級に熱い同情を注ぐものであった。彼は週刊紙『街』*La Rue* を創刊（1867.3.17.）し，より明確かつ激烈に反政府非難の論陣を張ったため，危険な反体制論者として禁錮 2 か月と罰金を課せられた（1868)。1870 年，彼は『人民の叫び』*Le Cri du peuple* を発刊，より過激な政府転覆を示唆しまた虐げられた貧民層に対する情熱的な共感を訴えたため，83 号で発行停止を命ぜられ，8 月に逮捕されるが，第 2 帝政崩壊後の 9 月 4 日に釈放された。パリ・コミューヌ成立と共に委員に任命され，政府軍との戦闘に参加，敗北後は追究を逃れ，一時サント－ブーヴの隠れ家だったオテル・ド・ロアンに命からがら逃げこみ，サント－ブーヴの秘書トルーバによってかくまわれた（1871.5.28.)。数週間後，無事イギリスに亡命する。ロンドン滞在中の著作で最も注目される作品は，彼の自伝的小説『ジャック・ヴァントラ』*Jacques Vantras*（1879）であろう。これは『少年』*L'Enfant*,『大学入学資格者』*Le Bachelier*,『反乱戦士』*L'Insurgé* の 3 部作からなり，ヴァレスのコミューヌの乱までの波瀾万丈の生活を描いている。1883 年に帰国,『人民の叫び』を復刊，以前に増してブルジョワ社会の不正と腐敗を糾弾、社会主義実現の主張を續けた。彼の圧倒的な迫力を持つ文体，映像豊かな文章は写実的リアリスム文学作品を生み出しており，革命的リリシスムを漂わし，19 世紀社会主義文学の第一人者に作者ヴァレスをしている。1885 年 2 月 14 日，サン－ミシェル大通り 77 番地の家で死去した。享年 53 歳。

10）1851 年 12 月 2 日以降の鎮圧は，パリで死者約 380 名，地方は不明。逮捕者は代議士 240 名，左派の闘士は共和派も含め 2.7104 名，判決はアルジェリアの強制収容所送りの代議士が 1 名，国外追放 69 名，一時的国外追放 18 名，釈放 122 名。一般人に関して，軍法会議での裁判へ 244 名，ギアナのカイエンヌへの流刑 198 名，アルジェリアの強制労働所 1.718 名，同労働なし 1.288 名，国外追放 368 名，一時的国外追放 299 名，居住地限定の禁足 1.199 名，保護監察処分 7.676 名，感化院送り 8 名，検事局送致 645 名，釈放 12.632 名である。但しこの数字はルイ－ナポレオンの温情による減刑の結果で，抗戦中に虐殺されたと推測される可成りの数の死者は入っていない。ヴァレスやユゴーの如く自発的に亡命した人々も多数いたのである。

11）1852 年 11 月 21 日，22 日の人民投票は，810 萬票中賛成 782 萬票という圧倒的多数で帝政復活を承認，12 月 2 日帝政が宣言され，ルイ－ナポレオンは皇帝ナポレオン 3

世となった。2 世を名乗らなかったのは，ナポレオン 1 世の子フランソワ・シャルル・ジョゼフ・ボナパルト（1811-1832）が，父の退位（1814.4.11.）に際し，後継者に指名されたが連合国側か拒否され，2 世として皇帝になれなかったからである。

12）Arsène Houssaye，本名は Housset（1815-1896）：北仏エーヌ県ブリュイエール生れで，少年時代は田園生活を送ったが，カミーユ・デムーランの友人だった木彫職人の祖父の影響で共和主義的雰囲気の中で生長した。母に無断で兵士になったが，フランス軍のアントワープ占領（1832.12.26.）には間に合わなかった。しかし 32 年 6 月 5，6 日のラマルク将軍葬儀の際のバリケード戦には参加できた。農業よりも詩作に熱中，亡き恋人のセシルを追悼する詩を作った。無一文でパリへ出発，コレラの流行もなんのその，すぐさまネルヴァルやゴーチエと親友になった。ミュッセのような金髪の捲き毛の美青年の彼は優しいダンディで多くの女性の相談役となった。悲劇女優ラシェルの後援でコメディー・フランセーズの支配人となり（1849-56），この大劇場を上手に管理した。多数の社交界の紳士，作家，詩人と交際し，多くの戯曲や小説を書いたが，見るべきものはない。注目すべき著作は，アカデミー・フランセーズ会員になってから同僚の会員たちを観察し機智に富んだ軽妙な筆致でその生態を記した『アカデミー・フランセーズの 41 番の椅子の歴史』*Histoire du quarante et unième fauteuil a l'Acadêmie française*（1855）と彼の幸稿な人生を回顧した『半世紀の想い出』*Souvenir d'un demi-siêcle*（1885-91）がある。これは彼の多彩で華やかな青春時代，劇場支配人としての交友を記して，風俗資料として価値がある。

13）Joseph Alexandre, baron de Hübner（1811-1892）：ウィーン生れのオーストリーの外交官。1833 年外務省に入省，1835 年パリに赴任，2 年後にアポニー伯爵（1782-1852）[22 の注 40]に代って駐フランス・オーストリー大使に就任した。しかし 1841 年メッテルニッヒに召喚され帰国，ポルトガルとの外交関係修復などに従事，またポーランドのクラコヴィの反乱と同市をオーストリー軍が占領し自領とした際，フランスと協議して了承をとりつけるためパリに赴いた（1846）。その後ミラノに私用で行った時 2 月革命の騒動に巻き込まれたが無事に帰国できた（1848）。1849 年再び駐仏特使となりパリに赴任，共和国大統領となったルイ‐ナポレオンと親交を結び，1853 年には彼の私的顧問になり、パリ協約締結の際には特使として協約に署名した（1856.3.30）。オーストリー政府は彼の業績を評価し，彼を正式に駐フランス大使に昇格させた。その後彼は帰国し警察大臣，ローマ駐在大使などを歴任した。本文中は伯爵だが男爵としている辞書もある。1871 年彼は

世界一週旅行に出発，アメリカ，日本，中国，インドシナ，インドを経て帰国，『世界一週散策』*Promenade autour du monde*（1873）と題し見聞を発表，正確で新鮮な観察と多くの挿画で大好評を博し，5 版を重ねた。1877 年にはパリの道徳・科学アカデミーの会員に選出された。

14）Eugènie Marie de Montijo de Guzmán, comtess de Téba（1826-1920）：フランス第 2 帝政期の皇后（1853-71）。スペインの大貴族モンティホ公 Conde de Montijo とマラガ駐在アメリカ領事の娘 Maria Manuel Kirpatrick の間にグラナダで生れた。絶世の美女で，皇帝となったナポレオン 3 世は一目惚れで彼女と結婚（1853.1.30.），以後彼女はその才智と美貌とセンスの良さで宮廷生活の中心人物となり，同時にファッション界のリーダーになった。1856 年 3 月 16 日，皇太子を生んでから帝政の継續を念願し，政治に介入するようになったという。カトリック的伝統の中で成長した彼女は保守反動的性格が強く，カトリックの利益のた皇帝のイタリヤ出兵に反対，外交面ではメキシコ遠征さらに普仏戦争開戦に皇帝を踏み切らせた。スダンでの降状（1870.9.4.）の報を聞きイギリスに亡命，瘸帝となった夫と暮し，彼の死（1873.1.9.）以後は一人っ兒の Eugène Louis Jean Joseph Napoléon（1856-79）と再興を夢みてボナパルティストと連絡し合っていたが，息子の死後は政治的勢力を失い，スペイン旅行中にセヴィーリアで客死した（1920.7.10.）

15）pavillon de l'Horloge：ルーヴル宮本館の西側翼棟の中心部の建物。ルイ 13 世による拡張工事により建造された。それまでの旧ルーヴル宮が手狭まだったので増築計画はアンリ 2 世の時すでに考えられ，アンリ 4 世が立案していたといわれる。この建設工事のためシャルル 5 世時代の塔などが取り壊わされた。建築家ジャック・ルメルシエ（1585 頃-1654）は先輩のピエール・レスコ（1510 頃-1578）の様式を尊重し，1 階，2 階，3 階も同じ様式で建造，半円形の 3 つの大窓のついた屋上階をその上にあげた。大窓の中には手をつないだ 2 体の女像柱の 4 つのグループを飾ったが，作者はサラザンである。工事の完成は，1640 年であるが，3 年後にルイ 13 世は死去，未亡人となったアンヌ・ドートリッシュは幼王ルイ 14 世と共に近くのパレ‐カルディナルに移転してしまう。

16）Elisabeth Anne Haryetty，通称 miss Howard（1823-1865）：イギリスの女優。長靴職人の娘で家出してヘイマーケット劇場でデビュー（1840）。多くの恋人から多額の援助をう富裕になり，ルイ‐ナポレオンの愛人として（1846），彼の政治活動を支援した。1852 年 9 月 14 日，チュイルリ富の夜会にベルヴィル大佐と共に彼女が出席した時，その輝しい美貌は出席者の注目の的となった。彼女が何者なのか誰も知らなかった。しかし彼

女がロンドン時代の皇帝の愛人とわかると，それは一つのスキャンダルになる。大統領に返り咲いた彼の公認の愛人だったが，ルイ‐ナポレオンがウージェニー・モンティホと結婚した時に縁が切れた（1853）。しかし彼女がこれまで彼のために使った費用は弁済され，ボルガール伯爵の爵位を贈られ，後にイギリス人の貴族と結婚した。デキストのHowarth はあやまり。

17）rue du Cirque：パリ第 8 区にあり，ガブリエル大通りとフォーブール‐サン‐トノレ街を結ぶ，長さ 240 米，幅 12 米の道路。この道路はガリエラ公爵の所有地に 1847 年に開通した。最初はジョワンヴィル街といったが，この道がシャン‐ゼリゼ遊園地シルクに通じていたので，1849 年から現在の名になった。この通りの 14 番地の家を，ルイ‐ナポレオンは大統領に選出された後，愛人のハワード嬢を住まわせるために借りた。1885 年にギュスターヴ・ド・ロートシルト男爵がこの家を買収し，現在の建物を建築した。

18）Virginia Oldoni, comtesse Verasis di Costiglione（1835-1899）：ジェノヴァの名門に生れ，ヴィットーリヨ・エマヌエレ 1 世（1759-1824）の侍臣と結婚した。ナポレオン 3 世の友好と援助を求めてオーストリーの干渉を排したいサルディニア王国首相ガヴール（1810-1861）は，彼女の類稀な美貌と魅力でルイ‐ナポレオンを籠絡し，皇帝の協力を得ようとした。密命を受けた彼女はパリに上京，忽ちルイ‐ナポレオンを誘惑して愛人になる事に成功（1857），イタリヤとフランスの同盟締結に貢献した。フランスの出兵により，マジェンタとソルフェリノの両会戦（1859.6.4.，6.24.）で仏伊連合軍はオーストリー軍に大勝，イタリヤ解放の第一歩になった。その後，皇帝の愛情を笠に着た専横の行為が皇后をはじめとする宮中の女性たちの反感を買い，パリを退去しなければならなかった。第 3 共和政になり，ルイ‐フィリップの第 4 皇子オマール公爵ルイ‐ドルレアン（1822-1895）に接近しオルレアン派を糾合しようとした（1837）。以後は完全な隠退生活に入り，世間との交際を一切断ってしまった。

19）Vittorio Emmanuele Ⅱ（1820-1878）：イタリヤ統一を果し「祖国の父」Padre della Patria と呼ばれた。サルディニャ国王だった父（1798-1849）の退位により即位（1849），カヴールの献策を容れクリミア戦争（1854-56）に参戦，フランスとイギリスの好意を得，ナポレオン 3 世の援軍によりオーストリー軍を破り，祖国統一の第一歩を踏み出す。フランスに対しては援軍の見返りとして，サヴォアとニースを割譲した（1861）。ガリバルディを支援してシチリア，ナポリを平定，ロンバルディヤ，パルマも参加し，ここに教皇領とヴェネツィアを除く全イタリヤを統一した。首都をフィレンツェに定めたが

(1865)，普仏戦争でローマに駐留していたフランス軍が撤退したため，ローマに入城(1871.7.2.)，ここにイタリヤの統一が実現した。勇敢な軍人だった彼は変愛でも猛者で多くの愛人をつくった故か，女性の力の偉大さを知っていたので，ナポレオン 3 世攻略のためカステリョオーネ伯爵夫人の派遣を思いついたのであろう。彼女の仕掛けたハニー・トラップは見事皇帝を捕えたのである。

20）Camillo Benso Cavour（1810-1861）：トリノ生れのイタリヤの政治家。工兵将校となるがその自由主義的信条のため退役に追いこまれ（1831），以後 16 年間農業に従事するかたわらイギリス，フランスを旅行して政治や経済の知識を学習，イタリヤ統一こそが祖国再興の鍵となると確信，バルボ伯爵（1789-1853）と共に『再興』*Il Risorgimento* を発行（1847），サルディニア王家を中心としたイタリヤ統一を主張した。1849 年に代議士となり，アゼリヨ（1798-1866）内閣の時，農相商相海相を兼職して入閣（1850），1852 年 11 月 4 日内閣首班となり自由主義を標榜した。財政の改善，軍備の増強，関税引下げによる貿易の振興など国力の充実に努力，クリミヤ戦争に参戦しパリ平和会議に列席してイタリヤの統一を各国に訴えた。またナポレオン 3 世とプロンビエールで秘密会談を持ち(1858.7.20.)，オーストリー軍駆逐のためのフランス軍派遣を確約させた。しかし皇帝が交戦途中で突如としてヴィアフランカ予備条約をオーストリーと締結，ヴェネチアをオーストリーの所属を認めて，カヴールに大いなる失望を与えた。彼はこのため引責辞任をする（1859.7.13)。しかし翌 60 年 1 月に再び組閣，内相外相海相の三相を兼務，ローマ教会との闘争を再開，ガルバルディのシチリア遠征を支援，イタリヤ統一の基礎を固めた。しかし内外の敵との長年の闘争に身心共に消耗したカヴールは，彼の最後の夢「自由な国家の中の自由な教会」の実現を見えることなく，1861 年 4 月 6 日，57 歳で死去した。

21）la princesse de Metternich：オーストリーの首相を務めたカウニッツ（1771-1794）の孫娘で，1795 年にメッテルニヒ（1773-1859）と結婚した Maria Eleonore Graf von Kaumitz-Rietberg（1775-1825）の間に生れた娘か，あるいはマリアの死後，彼がもし再婚していたならその 2 番目の夫人か不明。しかし彼女は宮中における反カスティリョオーネ夫人の急先鋒で，伯爵夫人を「大変なお馬鹿さん」と冷笑した。

22）Gustave Flaubert（1821-1880）：父は名医の誉高い外科医でルアーン市立病院の外科部長だった。フロベールはこの病院で暮らしたので，幼年時代から人間の病苦と死に接する機会が多く，ペシミスティックな人生観を抱くようになったという。兄が父の跡を継いだので，彼は法律の勉学のためパリに上京するが，そこでユゴーに偶然会いロマン主

義への関心を持つ。1844 年に神経の発作に襲われたため勉学を中止してルアーン近郊のクロアセ村の自宅に引き籠って，以後一生を創作に捧げ，「文学の修道士」と呼ばれるようになる。彼は気質的には同時代のロマン主義の豪壮雄大で華麗な映像を愛したが，他方勃興しつつあった近代科学の精緻な客観的観察態度にも共感した。彼のうちにあるこの 2 つの傾向は作品に明瞭に表現されている。前者の代表作は，古代カルタゴを舞台にした歴史小説『サランボー』*Salambô*（1862），本能と信仰の相剋を描いた『聖アントワーヌの誘惑』*La Tentation de Saint Antoine*（1849-56-74），故郷のルーアン大聖堂の彫刻やステンドグラスの絵や身近な不幸な女の一生を題材にした『三つの物語』*Trois Contes*（1877）がある。後者の系列は「田舎の風俗」Mœurs de province の副題を持つ『ボヴァリー夫人』*Madame Bovary*（1857），『感情教育』*Education sentimental*（1869），未完に終わった『ブヴァールとペキュシュ』*Bouvard et Pécuhet*（1881）がある。風俗紊乱と宗教冒瀆の罪で告訴されて（1.24.）いやが上にも世間の注目を集めた『ボヴァリー夫人』は作者を一躍時の人にしてしまう（2 月 7 日無罪判決）。しかしこの作品で摘かれた俗悪な人生の実態，「悲しい滑稽」grotesqne triste は，この作品を写実主義文学の傑作たらしめ，後に来る自然主義の先鞭をつけたものとなった。また『感情教育』は，フロベールのパリの学生時代を偲ばせる青年フレデリック・モローのマリ・アルヌーへの恋を横糸に，7 月王政から第 2 帝政に至るフランスの歴史的事件を縦糸にして織り出される物語で，青春の哀歓を描くと共に，2 月革命の騒乱の日々の年代記的正確な描写で同時代の歴史の証言となっている。『ブヴァールとペキュシュ』は親友で偶然手に入った遺産で仕事をやめ，ノルマンディーの田舎に家を買って移転，そこで暇にまかせ，自分たちの知識欲を満たすためいろいろな学問に手を出すが何一つとして物にならない。2 人の渡し難い阿保振りを描いて，当時のブルジョワたちの持っていた知識人になりたいという虚栄心や科学に対する盲目的信頼を批判している。これらの作品はいずれも冷静客観的な文体で描写されており，写実主義から美に到達するため，言葉を洗練する事に務めた。クロワセに隠棲しているため，友人との連絡手段として膨大な手紙を書いている（『書簡集』*Correspondance*（1926-53））。文通の相手は文壇関係者を中心に多種多彩だが，なかでも敬愛する先輩ジョルジュ・サンドへの手紙が多い。彼女もフロベールに劣らぬ手紙の書き手だった。サンドへの手紙の文面には，生涯妻帯しなかったフロベールの女性に対する愛情を微妙に投影している箇所が散見され，2 人の並々ならぬ親愛関係を示して興味深い。彼はまた後輩の作家たちの良き先輩としても振舞ったが，特にモーパッサン（1850-1893）

の面倒をみてやっている。未完の原稿『ブヴァールとペキュシュ』の上においかぶさって死んでいる所を発見された（1880.5.8.）が，いかにもフロベールらしい最後と人々は噂したという。

23）La Rocefoucauld：フランス西部アングーモア地方出身の名家で，1019 年に初めて歴史に登場，フランソワ 1 世に仕え功名をたてたラ・ロシュフーコー伯爵が有名で，王からその名のフランソワをを贈られ，以後代々長男はフランソワを名乗るようになる。5 代フランソワの時に公爵となる。最も有名な人物は 6 代のラ・シュフーコー（1613-1680）で，『箴言』*Réflexions ou sentences et maximes morales*（1665）を書いたモラリストである。

24）Usès：南仏ガール県の名家で，祖先は遠くシャルルマーニュ時代まで遡る。1565 年にシャルル 9 世から公爵に敍せられた。ユゼ市を中心とする一帯は教皇領であったが（5 世紀以降），伯爵領の肩書も持っていた。中世時代は商工業の中心都市で，1493 年には既にフランス最初の印刷物ユゼ司教管区の祈祷書を印刷している。

25）Vogüé：侯爵や伯爵を輩出している家柄で，最も有名な人物は駐ロシヤ大使を務めた Eugêne Melchoir, comte de Vogüe（1848-1910）で，フランスに初めてトルストイやドストエフスキーのロシヤ文学を紹介した。1888 年にアカデミー・フランセーズ会員。マクシム・ゴーリキーの評伝（1906）や『ジャン・ダグレーヴ』*Jean d'Agrève*（1897）のような小説も書いている。

26）Blacas d'Aulps：13 世紀まで遡るプロヴァンスの旧家で，プロヴァンス伯爵レイモン・ベランジェ 5 世に仕えた勇敢な騎士の 1 人で「偉大なる戦士」の異名をとった Blacas d'Aulps（1235 歿）を先祖に持つ。

27）Luynes：イタリヤのトスカナ出身の名家アリベルティの一族トマソ・アリベルティ（1455 歿）が先祖。彼は 15 世紀初頭に現在の南仏ヴォークリューズ県のヴナスの伯爵領に定住，孫のレオンの時フランス風に改姓アルベールとなる。彼は 1535 年 dame de Luynes の Jeanne de Sêgur と結婚して爵位を得た。最も有名な人物はルイ 13 世の親友として，それまで王を軽んじ横暴な行為の多かったアンクル元帥コンチーニを暗殺（1617.4.24.），ルイ 13 世の親世を実現させた Charles d'Albert, duc de Luynes（1578-1621）である。

28）Pozzo：名法曹家や建築家を出したナポリの旧家だが，フランスに関係深いのは，コルシカのアジャクシオに貴族ポゾ家であろう。コルシカ独立をめぐりナポレオンと対立した親英派 Charles Andre, comte de Pozzo di Borgo（1768-1842）は，宿敵ナポレオ

ン打倒のためオーストリー，プロシャ，ロシヤ，イギリスの神聖同盟結成に努力，ロシヤのアレクサンドル 2 世の信任を得，ナポレオン沒落後，駐フランス・ロシヤ大使に任命されパリに住んだ（1815-34）。ブルボン王朝とロシヤの親善関係の増進に努力する。駐英大使（1834-39）を最後に引退し，パリで歿した（1842.2.15.）。

29）Duchâtel：勅令管理局長で 1808 年に伯爵に敍せられ代議士にもなったシャルル・ジャック・ニコラ（1751-1845）やその子シャルル，comte Tanneguy（1803-1867）が有名。特に後者は『グローブ』紙で政治・社会問題の評論家で鳴らし，1833 年には父の地盤のシャラント‐アンフェリュールの Jonzac から代議士に選出され，農相（1843-36），経済相（1836-37），内相（1844）を歴任。その間に巨富を手中にし、政界引退後は絵画募集と自ら絵を描いて楽しんだ。アングルの名画『泉』*la Sourse* も彼が入手している。ジャン・サン・プールの暗殺で史上有名な Tanneguy Duchâtel（1369-1449 頃）が先祖と自称しているが，これは疑問である。但し有名貴族を自分の周囲に侍らせるのを好んだナポレオンが，彼にこの由緒ある名を承認したお蔭で，デュシャテルは公然とタヌギイ伯爵を名乗ることができた。

30）Les Molé：法曹家の名門，アンリ 4 世の改宗を密かにお膳立をし即位させたパリ高等法院検事総長エドワール・モレ（1558-1614），フロンドの乱の時，対立する王党派と反乱貴族の間で和解に奔走し，後に大法官になったマチュー・モレ（1584-1656）らがいるが，19 世紀においてはモレ伯爵ルイ・マチュー，（1781-1855）である。彼については［ＸＸⅢ］の注 29 を参照して下さい。

31）Les Broglie：ピエモンテのチエリ出身の貴族で，その分家が 1634 年フランスに来住，1656 年に帰化し，1671 年に侯爵，1742 年に公爵，神聖ローマ帝国大公に敍せられた（1759）。軍人，政治家，学者など人材が輩出している。7 月王政時代に文相（1830），参事院議長（1832-34），外相（1834-36），首相（1835）を歴任した政界の大物 Achille Charles Léonce Victor, duc de Broglie（1758-1870）が最も注目すべき人物。彼の子 Jacques Victor Albert, duc de Broglie（1821-1901）も政治家で 1877 年に首相兼法相に就任，また歴史家として『ルイ 15 世の秘密外交』*La diplomatie secréte de Louis XV*（1879）などの著書がある。

32）Les Noailles：フランス南部コレーズ県ノアイユ出身の名家で先祖にフランス海軍提督（1547）でロンドン駐在フランス大使になったアントワーヌ・ド・ノアイユ（1504-1562）がいる。ルイ 14 世の時代にスペイン戦役で武功をたて陸軍元帥になった

(1693) 第 2 代公爵アンヌ・ジュール (1650-1708), その子も同じくポーランド継承戦争などで勇戦し父に續いて元師になった (1734)。しかし最も有名な人物は女流詩人, 小説家として名を成した Anna Elizabeth, comtesse Mathieu de Noailles(1876-1933)である。父はルーマニア王家の一門ビベスコ家の出身で, 彼女はパリで生れノアイユ伯と結婚した。女性特有のデリケートな優しさで, 自然, 青春, 恋愛, 死などを抒情的に歌い, ロマン派最後の詩人と呼ばれた。代表作は『永遠の力』*Les forces éternelles* (1920) である。

33) Les Montalembert：フランス中西部シャラント県アングレーム郡 Ruffec (現在の人口約 4.500 人) を中心とした男爵領の旧制度におけるアングーモア州とポワトゥー州の境界にあった城の名を名乗ったフランスの旧家。11 世紀半ば頃からモンタランベール男爵と称し, その家系は 1250 年頃に Sibylle de Gourville と結婚したモンタランベール卿ジャン以降明瞭になっている。家紋は「銀地に剱で固定した十字架」D'Argent à une croix ancrée de sable である。この家系は Esséをはじめ 6 つの分家がでている。最も有名な人物はモンタランベール伯爵シャルル・フォルブ (1810-1870) だが ([ＸＸⅡ] 注 14 参照), その他にモンタランベール侯爵マルク・ルネ (1714-1800) がいる。彼は前者の大伯父で要塞建設の名人として, ヴォーバン (1633-1707) 以降の最高の技師と評価されている。

34) ジェズイットはイエズス会で, それまでフランスでは多数の学校を経営し子女の教育に当っていた。

les Oiseaux は不明だが, 1852 年に出版された熱烈なフーリエ主義者の作家 Alphonse Toussel (1803-1885) の『鳥の世界, 愛の鳥類学』*Le Monde des Oiseaux, ornithologie passionnelle* に関係があるのではないかと思われる。彼はこの作品の中でフーリエのファランステール思想を説くと共に, 白隼や隼の口を借りて愛情こそが世界の本質, 生命の根源で, 女性がこの愛で人類を管理すべきと説いた。鳥や動物の世界で雌が優位なものはすべて立派な種であるから, 人間社会が女性の支配になっても決して悪くならないと主張した。この説は当時の女性たちに大いに歓迎されたという。この本は鳥類の解説書としても傑作で, フランスに生息していた 360 余の鳥の精密な観察記録となっている。

35) Jockey Club：jockey は元来フランス語の馭者を務める小柄な男 jaquet が語源で, そこから騎手を意味する言葉 jockey が生じたという。馬匹の改良を目的としてイギリスのニュー・マーケットに創立され, 会員は貴族のみの特権階級のクラブだった。飼育した馬の耐久力, 走力を測定するための馬場が設営され, これがやがて競馬場になる。チャー

ルス 2 世治下の 17 世紀半ば頃といわれる。クラブの建物は競馬場の周辺に建築されたが，会員もクラブも増加し，富裕なブルジョワも加入が認められ，建物も次第に酒落れた豪華なものになっていった。

1833 年，パリに設立されたジョッキー・クラブは，このイギリスのニュー・マーケットのクラブを手本にしている。創立者は 14 名で，オルレアン公爵，タムール公爵，ヘンリー・シーモア卿，デミドフ伯爵など錚錚たる人たちだった。彼らの馬匹改良は，単なる競争用の馬でなく，当時の戦力の中心であった騎兵隊の乗馬の育成という軍事目的もあった訳で，レースを楽しむとい平和なレジャーではなく，可成り血腥いものだったのである。1833 年 11 月 11 日に発会式を挙行，やがて政府やセーヌ県知事らの好意で，シャン・ド・マルスからブーローニュの森のロンシャン競馬場の建設と使用を許可される。オープンは 1857 年 4 月 27 日。1834 年 5 月，シャン・ド・マルスで始めての競馬が行われた。翌年はオルレアン公爵の要望によりシャンティイでも競馬が開催された（1835.4.24.）。この最初の優勝馬はジョッキー・クラブ会長のシーモア卿の持馬フランクでダービー賞と賞金 5.000 フランを獲得した。以後順調に発展し現在に至っている。

36）rue des Ecoles：第 5 区にあり，カルジナル - ルモワーヌ街とサン - ミシェル大通りを結ぶ長さ 775 米，幅 20 米の道路。1852 年に一部開通し，1855 年に全線が完成したが，このため 13 世紀と 14 世紀からの古い町が消滅した。これら貧民街の一掃は，治安上，衛生上，また交通の便のためにも必要で，オスマン知事の狙いであった。エコル（学校）街の名は，サント - ジュヌヴィエーヴの丘の麓を東西に走るこの道路脇に，パリ大学，コレージュ・ド・フランス，ルイ - ルグラン高校などの教育機関が蝟集しているからである。この通りの 2 番地から 4 番地にかけてあったサン - フィルマン神学校はサン・ヴァンサン・ド・ポール（1576-1660）が一時校長を務めた（1624）由緒あるコレージュ・デ・ボン - ザンファン（1250 年頃の創立）の後身だが，大革命時代には牢獄として使用され，1792 年 9 月 2 日，3 日，4 日にわたり，監禁されていた 165 名の司祭たちが虐殺された悲劇の舞台として有名であった。建物はその後，盲学校（1816-43），兵営（1844-60），商店（1860-1906）など転用されたが，1920 年に取り壊された。

37）Eugène Lami（1800-1890）：フランスの画家，水彩画家，版画家。グロ（1771-1835），次にオラース・ヴェルネ（1789-1863）に学び，グロのアトリエで同門だったイギリスの薄倖の天才的水彩画家リチャード・パークス・ボニングトン（1802-1828）に同行しロンドンに滞在，ターナーの画風に感動する。ラミは最初の頃歴史画や戦争画を描い

ていたが，ボニングトンの流麗軽快なタッチに触発され，風景やパリ市民の日常を細密に描く風俗画に転向，絵画による年代記作成に努力した。ボードレールは彼を「公認のダンディスムの詩人」le poète du dandysme officiel と呼んだ。

38）Georges Eugène,baron Houssmann（1809-1891）：フランスの行政官。アルザスのドイツ系の家庭に生れ，新教徒だった。弁護士として出発したが，7 月革命の 1833 年官界に入り，1848 年末にルイ‐ナポレオンにその行政手腕を認められ，ヴァール（1849），ヨンヌ，ジロンド（1851）の各県知事を歴任した。1851 年 12 月 2 日のルイ‐ナポレオンのクーデタに際し，ジロンド県における成功に貢献し，1853 年 6 月 23 日，パリを管区とするセーヌ県知事に抜擢された。皇帝になったナポレオン 3 世は，亡命時代のロンドンで夢想していた首都パリの改造を腹心となった新知事オスマンに命じたのである。16 年間の在職中に彼は皇帝の夢を実現すべく努力する。有能な技師たちを動員し，東西南北に通じる大通り（ストラスブルー，セバストポール，サン‐ミシェル，リヴォリ）を開通させ，グラン・ブルヴァール，サン‐ジェルマン，オペラの各道路を延伸開通させる。ロンドンに劣らぬ緑化作業として公園や庭園を整備（リュクサンブール，モンソー，モンスーリ，ビュット‐ショーモン，ブーローニュ，ヴァンセンヌ），アルマ橋，ソルフェリーノ橋の架橋，中央市場の整備，上下水道の充実，ガス燈の普及を実現した。また近郊の村々（オートゥーユ，パシイ，モンマルトル，グルネル，ヴォージラール）をパリ市に編入し，パリの成長を容易にした。特に大通りの完成は，騒乱の火元になっていた貧民街を消滅させ，バリケード建造は困難になり鎮圧部隊の火力の有効利用を可能にさせる治安対策も秘められていた。この巨大な土木工事は膨大な予算（当時の金額で約 20 億フラン）を必要とし，工事の契約や予算の決定がならずしも明瞭なプロセスをふんでいない，という疑惑と不信が生じていた。オスマンに対する批判と攻撃はジュール・フェリー（1832-1893）が発表したパンフレット『オスマンの空想的予算』*Les Comptes fantastiques d'Haussmann*（1867）で頂点に達した。お伽話 conte fantastique にひっかけたこの小冊子は，オスマンに致命傷を与えた。彼は，1870 年 1 月，エミール・オリヴィエ（1825-1913）首相によって解任された。第 3 共和政になっても彼は信念を変えず，忠実なナポレオン支持派の代議士として議会に席を占めた。パリを近代都市として新生させた彼の功績は否定できないが，その都市計画はその居住区を市民階級の差別化に固定させた，という批判がある。『回想録』*Mêmoires*（1890-91）を残している。1891 年 1 月 12 日歿。

39）『貧困の根絶』*L'Extinction du paupérisme*（1846）を指す。1840 年 8 月 6 日の

ブーローニュでの第2回のクー・デタの失敗後，終身禁錮の判決を受け，要塞監獄ハムに投獄されている間，特にサン‐シモンを研究しその影響の下に執筆し著書である。民主的皇帝として，人民大衆に宗教的道義的情操を函養させ，また貧困を根絶する社会主義的経済政策を実行すると主張した。

40）Nicolas Flamel（1330頃-1418）：ポントワーズ出身といわれる錬金術師。多くの伝説に包まれた人物。サン‐ジャック‐ラ‐ブーシュリ教会の近くで代書屋の店を開いていたが，写本の装飾品絵を描いたり，デザインをしたり，墓碑銘を作成したり，小規模ながら書物の販売もしていたという。筆記用具のシンボルの円筒を描いた看板 Au Barillet を掲げ，金持ちの子弟を手習いの生徒にし，彼らに写本を模写させてはそれを転売していた。伝説によると，ある日偶然に入手した樹皮21枚に書かれ7部から成る古文書に記された文章を苦心の末に解読し，錬金術の秘法を会得したという。古文書の作者はユダヤ人のアブラハムなる人物で，普通の金属を金や銀に変化させる「賢者の石」pierre philosophale の秘密や不老不死の霊薬の製法も書いてあった。巨萬の富を得たフラメルはそれを貧者の救済や教会への寄進に使い，パリ市民から敬慕された。1407年には「大きな切妻」Grand-Pignon と名づけた家を建造し，無料で貧しい人々を住まわせている。またイノサン墓地の遺骨安置用の回廊を寄進し，墓地の不足を解消してやった。彼が莫大な献金をしたのは，病院14，礼拝堂3，教会7に及んだ。妻に遅れること3年の1417年3月22日，フラメルは死去し，サン‐ジャック‐ラ‐ブーシュリ教会に埋葬された。一時行方不明になっていた彼の墓碑銘の石板は1847年に再発見され，クリュニー博物館に保存されている。またフラメル自筆の遺言書は国立古文書館に所蔵されている。

現在のパリ第2区にあるニコラ・フラメル街とエクリヴァン街（リヴォリ街の開通で消滅）の角に，フラメルの家があった。彼の遺言書に錬金術の秘法が記されているという噂が何時の間にか広がり，彼の家にもその秘法の文章が隠されているという話もでき，フラメル死後3世紀以上も後の1756年，この家の上から下まで，天井から地下室，壁や柱や梁まで穴をあけられる徹底的な捜索が行われた。この家は1852年に取り壊され，現在，地下鉄1番線がこの家の地下室跡を通っている。Grand-Pignon の家は大部改造されたが，第3区のモンモランシー街51番地に現存し，パリで最も古い家の一つになっている。

41）collège de Cluny：第5区のソルボンヌ広場に面して建っていた4つのコレージュの1つ。東側はクリュニー街に沿い，南側は城壁まで，西側は現在のサン‐ミシェル大通りまで広がっていた敷地に在った。クリュニー修道院長イヴ・ド・ヴェルジにより1261

年に創立されたこの学院は，哲学と神学の勉強のため各教団からパリに派遣された 40 名の修練士（修道誓願を立てる前の者）を収容した。このコレージュは非常に大きな礼拝堂を持ち，パリで最も遅い晩祷を一年を通じて午後 6 時にすることで有名だった。大革命の時に閉鎖され，1806 年から 15 年まで画家ダヴィッド（1748-1825）がアトリエにこの礼拝堂を使用して，ルーヴル美術館に展示してある『ナポレオンの戴冠式』*Sacre de Napoléon* を描いている。1843 年に一部が取り壊され，1862 年に完全に解体された。アシェット書店が残った部分を倉庫として使用したこともある。

42）couvent des Jacobins：第 5 区サン - ジャック街 156 番地にあった。1215 年にトゥールーズでサン - ドミニックにより創立されたドミニコ教団のパリ支部として，1217 年にノートル - ダム大寺院の近くに開設されたが，翌 18 年にジャン・バラストルが巡礼のために設立した（1209）サン - ジャック・ホスピスに移転した。このホスピスの方が広くサン - ジャック・ド・コンポステラへの巡礼路に沿っていたからである。礼拝堂はサン・ジャックに捧げられた。という訳でドミニコ派の修道士たちはジャック（ヤコブ）に帰依する人の意味で「ジャコバン」と名乗ったのである。聖王ルイ 9 世はこの修道院に教会を寄進し，以後諸王の手厚い保護を受け，付属学院から 12 名の聖者，4 名の教皇，58 名の枢機卿を輩出している。またアンリ 3 世の暗殺犯ジャック・クレマンもこの修道院に属していた。このジャコバン修道院は 1790 年に閉鎖され，ダンス・ホールなどに転用されたが，1800 年から 1849 年にかけ取り壊され，最後に残っていた正門も 1866 年に取り払われた。敷地跡にスフロ街など 4 本の道路が造成された。

43）église Saint-Benoit：第 5 区のサン - ジャック街 55 番地から 73 番地にかけて在った。この教会は 6 世紀から 1790 年まで，サン - セヴラン，サン - ジュリアン - ル - ポーヴル，サン - テチエンヌ - デ - グレの 3 つの教会と共にソルボンヌの北東の角地を占めていた。1030 年にアンリ 1 世がパリ司教に認可したもので，当時はéglise Saint-Bache-Saint-Serge といった。12 世紀の再建時に，種々の理由からéglise Saint-Benoit と改称された。この教会の参事会員ギョーム・ド・ヴィヨンが引き取って養育したのが後の詩人フランソワ・ヴィヨン（1431-1485）である。彼は此処で生長し，後に避難所として舞い戻ってくる。この教会は 1790 年に閉鎖され，穀物取引所などに利用されたが，1831 年に「パンテオン座」thêâtre du Panthéon になった。その後閉鎖，再開を繰り返し，1850 年頃に消滅する。教会は 1854 年に取り壊された。

44）marché des Innocens：この市場は旧イノサン墓地と教会の跡地に，1788 年に開

設された。1811 年に周囲に屋根付きの広場を造成し，それまであった直径 5 米の赤いパラソルの店 400 から 500 を退去させた。そして広場の中央に，イノサン教会に向かい合っていたジャン・グージョン作の噴水（1549）を移動させた。1830 年の 7 月革命の時にこの市場で戦死した革命戦士 55 名の遺体を埋葬するため，縦横 5 米と 2.3 米　深さ 3.3 米の穴を噴水と現在のピエール・レスコ街の起点の間に堀り，近衛部隊のスイス人兵士 35 名の遺体の埋葬のため，2 つ目の穴を掘ると，以前のイノサン墓地時代の遺骨が出てきたという。革命戦士の遺体は，1840 年 7 月 29 日，バスチーユ広場の円柱の下に盛大な葬儀と共に改葬された。1858 年に中央市場の拡張のためイノサン市場は廃止，ピエール・レスコ街の延長により跡地は 2 分され，西側は住宅地，東側は現在のイノサン広場で，その中央に再びジャン・グージョンの噴水が移転された（1863）。私事で恐縮だが，20 数年夏休みをイノサン広場に面した家具付きホテルで過ごし，毎日この噴水を眺め，広場の雑踏を見聞した懐しい想い出がある。

45）Maxime Du Camp（1822-1894）：2 歳の時に外科医の父テオドール・ジョゼフ（1793-1824）を失うが，多くの遺産に恵まれ自由な生活ができた。1844 年からトルコ，ギリシャ，アルジェリヤを旅行し『東方の風景と想い出』*Souvenirs et paysages d'Orient* を出版する（1848）。翌 49 年には文相使節としてエジプト，パレスチナ，小アジアを周遊し 3 年間祖国を留守し，この間の旅行記『エジプト，ヌビア，パレスチナ，シリア』*Egypte, Nubie, Palestine et Syrie* を発表する（1852）。この旅行の一部にフロベールが同行した。彼は創刊者の 1 人になった『ルヴュ・ド・パリ』誌に，フロベールの『ボヴァリー夫人』を掲載した。活動的な彼はガリバルディのシチリア遠征にも同行している。政治的自由主義者である彼はローマ教皇の世俗的権力を攻撃，またロマン主義的病から青年を実践的生活に立ち戻させようとした。2 月革命時代の青年たちを描いた『失われた力』*Les Forces perdues*（1866）は，フロベールの『感情教育』に影響を与えている。彼と同行したブルターニュ旅行（1847）は，2 人の友情を醸成したが，世俗的出世欲を常に抱いていたデュ・カンと既に俗世間のすべてに軽蔑を抱いていた芸術家フロベールの間には所詮水魚の交りは成立しなかった。多才な作家だった彼は，美術評論家，風俗史，パリ・コミューヌの歴史など多くの作品を残したが，今日最も価値ある作品は『文学的回想』*Sovenirs littéraires* 全 2 巻（1882-83）で，彼が交遊した画家や作家，特にフロベールの動静を証言して貴重な資料となっている。

46）place de l'Etoile：第 8 区，第 16 区，第 17 区にまたがる半径 120.43 米の広場で，

中央に凱旋門が聳えるパリの代表的な名所の一つ。シャン‐ゼリゼ大通りをはじめとする12本の大通りが放射状に出ているので，Etoil（星）の名があると一般に言われているが，1730年当時この辺りが丘陵地帯だった頃，何本かの田舎道がここで交叉していて，「星が岡」butte de l'Etoile と既に呼ばれていた。恐らくこの丘の頂上から見ると，空には無数の星が，地上にはパリの灯りが眺められた事であろう。

この丘を崩し平坦にして，コンコルド（当時はルイ15世）広場からヌイイ橋まで同じ傾斜をもつ坂道に改造し馬車の交通を便利にしようという計画を，建築監督官アンジュ・ガブリエル（1698-1782）が提案，1768年から74年にかけて実行され，瘠土はシャン‐ゼリゼ大通りの土盛り工事に使用された。

こうして造成された広場も，凱旋門が着工された1806年頃は放置されたままで，ルイ16世が処刑された当時は8角形だった。ここから出る道路も5本にすぎず，現在のシャン‐ゼリゼ通りとグランド‐アルメ大通りにあたるパリ‐ヌイイ街道，クレベール，ワグラム両大通りにあたる微税請負人の城壁の外にあった2本の環状道路，イトルフ（1792-1867）が完成させることになる「皇后」（現在のオッシュ）大通りだけだった。1854年8月31日の布告により現在の大通りの建設が決定され，1857年に開通する。当時はほとんど人家などはなかったから，立退きや取り壊しの手間はかからず，工事は順調に進行した。

現在の12本の大通り（シャン‐ゼリゼ，フリートラント，オッシュ，ワグラム，マクマオン，カルノー，グランド‐アルメ，フォッシュ，ヴィクトール‐ユゴー，クレベール，イエナ，マルソー）は，直径240米のこの円形広場から，正確かつ規則正しく放射線状に設置され，その中心に凱旋門が聳えている。またこの広場をめぐるようにペルスブール街とティルジット街が造成され，イトルフはこの広場とこの街の間に，同じ正面を持つ12軒の邸宅を建築させたが（1858），オスマンは広場の大きさに対し邸宅の高さ（16米）が低すぎてバランスがとれていない，と断じて，背の高い樹木を植えさせ全体の構図を見事に仕上げた，と語っているそうである。エトワール広場と命名されたのは1863年のことだが，現在の正式名称はシャルル・ドゴール広場である。しかし長い間親しんできたため，エトワール広場も普通使用されている。

47）L'Arc de Triomphe de place de l'Etoile：現在の正式名称はシャルル・ドゴール広場だが，長い間呼び慣れてきたエトワール広場が今でも普通に用いられている。第8，第16，第17の3つの区にまたがるこの広場は，文字通り，パリ西部の交通の要衝で，12

本の大通りが放射線状に伸びており，宛ても星の光の輝きの如き景観から，「エトワール」（星）広場と広く呼ばれるようになった。シャン‐ゼリゼ街の端から眺めると，現在でも緩い傾斜地がたかまる頂上に凱旋門が建っているのがわかるが，昔はルールの丘と呼ばれ，傾斜はもっと急だった。1768 年から 74 年までかけて丘を崩して平坦にする工事が実地されたのだが，その目的はルイ 15 世広場（現在のコンコルド広場）とヌイイ端までの区間を同じ傾斜をもつ道路にするためであった。その結果，一番高い所が 5 米ほど削られた。実はこの小さな丘が 1730 年頃には既に「星が岡」butte de l'Etoile と呼ばれていて，何本かの田舎道が此処で交叉していた事は前述の通りである。

この広場を記念建造物で飾ろうという着想は，ルイ 15 世時代にあり，1758 年にある建築家が，国王の像を載せた「勝利の象」un éléphant triomphal 建造を提案していた。1798 年に内務大臣が，こに広場の装飾のための建築コンクール開催，13 の計画案が提出されたが，採用に至らなかった。

1806 年 2 月 18 日の布告で，ナポレオンは，オーステルリッツの勝利と共に凱旋した時，大軍団の栄光を記念するにふさわしい巨大な凱旋門を建設するように命じた。シャルグラン（1739-1811）の案が採用され，1806 年 8 月 15 日に定礎式が挙行された。しかし，石灰岩の地盤は，巨大な建物を建造するには余りにも脆弱だったので，土台の造成に 2 年の歳月を要したのである。

ここに一つの挿話がある。ジョセフィーヌを離婚して，オーストリーの皇女マリア‐ルイザと再婚するナポレオンは，新妻のパリ入城をシャン‐ゼリゼ通りを通ってしようと決意，ようやく壁面ができかけたこの門に完成しているような外観を与えるため，シャルグランに命じて画を描いた巨大なカンバスを足場に張って，完成した仮姿を作成するように命じたのである。期限のかぎられた突貫工事のため，足元をみた職人たちが，1 日 4 フランの日当の改訂要求を繰り返して遂に 24 フランに値上げさせるのに成功し，見事に入城式までに工事を完遂したのだが，政府の方が役者が一枚上で，いざ支払の段になると，不当な要求をするなら逮捕するぞ，と強権発動をちらつかせ，結局，1 日 4 フランの日当しか支給しなかったという。

シャルグランは，1811 年 1 月 20 に歿するが，凱旋門は未だ地上僅か 5 米ほどしか仕上がらなかった。王政復古となり，ブルボン家はこの記念建造物の足場を撤去させただけだった。ルイ 18 世が 1823 年 10 月 9 日に工事の再開を命じたが，建設は遅々として進まず，パリ市民の嘲笑の的になってしまう。

本格的な工事の再開は，1833 年 8 月，ティエールが大革命と帝政時代の武勲を記念するため，有名な彫刻家たちにそれぞれの壁画装飾を責任もって分担する区割を命じた時である。かくて幾多の困難を突破して，この記念建造物は，1836 年 7 月 29 日，ルイ‐フィリップにより完成式が挙行されたのである。しかし，カルーゼルの凱旋門にみられるように，門の頂上を飾る装飾，たとえば軍馬に索かせた戦車などのような装飾品を据えなければ本当の完成とはいえないので，この意味からエトワール広場の凱旋門は今日でも未完成なのである。総工費は 9.303.507 フラン 50 サンチームである。高さ 50 米，幅 45 米，柱のそれぞれには大軍団の勝利を示す彫刻が飾られている。門の直下は一無名戦士の墓（1921 年 1 月 28 日埋葬）で，毎夕 6 時 30 分に追悼の灯（最初の点燈は 1923 年 11 月 11 日）がつけられる。柱には将軍たち 558 名の名が記されている。

48）下水道 égout：パリの下水道はガロ‐ロマン時代の遺跡が発見されているが，これは 3 世紀頃に侵入したゲルマン民族により町が破壊されたため放置されたという。下水道を記録した最も古い文章は 1325 年のものであるが，水洗便所程度のものである。その後も少しづつ建造されていくが，全体的な統一がなかったため，迷路状態で，入ったら 2 度と地上に出られぬ危険があり，かつ甚だ不衛生で悪臭のため窒息しそうだった。ユゴーが『レ・ミゼラブル』の第 5 部第 2 章で『ヨブ記』にでてくる巨大な怪獣レヴィアサンの腸に見立てて，この下水道の歴史や現状を記している。主人公ジャン・バルジャンがマリウスを背負ってバリケードから脱出する時に辿るのもこの下水道である。1832 年のコレラの流行の後，衛生的な近代的下水道の建設と浄水施設の設置の必要性が確認され，パリ市は建設に努力し，特に 1854 年にオスマンがベルグランに命じて大規模な下水道整備を命じてから本格化する。当時 163 粁だった下水道は 1870 年には 536 粁に延長され，第 2 帝政崩壊時には約 1.000 粁になった。この飛躍的発展に対して，ナポレオン 3 世を仇敵視していたユゴーも彼をほめている。現在では下水道網の総延長は 2.100 粁を越え，清潔で明るく，パリ観光の名所の一つになっている。

49）コレラの流行は，1832 年の大流行（死者 18.402 名）の後，1849 年 3 月，1865 年 9 月，1873 年，1884 年と流行するが，防疫対策により死者は大幅に減少している。テキストの 1863 年はあやまりであろう。

50）Louis Tullius Joachim Visconti，イタリヤ名 Lodovico Tullio Gioacchimo Visconti（1791-1853）：イタリヤ生れの建築家、父は有名な考古学者，ローマに生れ，ルーヴルに赴任した父と同行しパリに来て（1799），ペルシエ（1764-1838）に学び，ナポレ

オンの帝室建築家になる（1850）。サン‐シュルピス教会前の泉水などを建造，アンヴァリッドにナポレオンの墓を作った。ルーヴル宮とチュイルリ宮の連結工事を指揮したが，完成を見ることなく歿し，工事はルフュエルが引き継いだ。

51）Hector-Martin Lefuel（1810-1880）：ネオ・バロック様式の建築家。1839 年ローマ大賞を得てイタリヤ留学。1854 年，ヴィスコンティの後を継ぎ，ルーヴル宮新館（1852 年起工）の主任建築家となり，ヴィスコンティの案をさらに豊に肉つけし，それまで非フランス的とみなされてきたバロック的性格を充分に盛りこみ，第 2 帝政様式の代表作として，世界的な影響を与えた。1863 年から 68 年にかけ南側ギャラリーを改造，レスコ以来 3 世紀余を費したルーヴル宮工事を完成させた。1871 年 5 月のパリ・コミューヌの乱でチュイルリ宮は放火により焼失したが，建物の両端にあったフロール館とマルサン館は，1871 年に再建された。セーヌ川側のフロール館は彫刻部門の展示室，リヴォリ通り側のマルサン館は装飾美術館として使用されている。

52）église Saint-Augustin：第 8 区の同名の広場に在る。それまでの木造の小さな教会に代わり，1860 年から 68 年にかけて建立されたビザンチンとイタリヤ様式の混合スタイルで，直径 25 米，高さ 50 米のドームを持つ。ドームの上に高さ 20 米のアンテナ状の尖塔をいただいている。ドームの周囲は，高さ 40 米の円天井を持った 4 つの塔が附属している。落成式は 1868 年 5 月 28 日であった。

53）église de la Trinité：第 9 区カレ街 21 番地に，1850 年に創建された礼拝堂が，この教会の前身である。翌 51 年に近くのクリシー街 12 番地の建物に移転，1860 年 12 月 25 日付の布告により，ショッセ‐ダンタン街，クリシー街，ブランシュ街，サン‐ラザール街が取り囲むエスティヤン広場に面する土地に新築された。設計はバリュ（1817-1855）で，工事期間は 1863 年から翌 67 年にわたった。総工費は約 400 萬フランである。正面玄関を降ると，滝をしつらえた泉水を持つ広場に出る。正面玄関のポーチの上に聳える鐘楼は高さ 63 米でギョーム作の彫像で飾られている。内部もカルポー（1827-1875）らの作品で飾られている。1867 年に奉献され，1913 年に聖別式が挙行された。

54）église Sainte-Clotilde：第 7 区にあり，ラス・カーズ街に面している。フォーブール・サン‐ジェルマンに新しい教会が必要と，パリ大司教とセーヌ県知事が認め，シャブロル知事がベルシャスの囲い地に教会建立の認可を議会に求めたのが，1827 年初頭だった。しかし 1830 年の 7 月革命で工事は延期となり，1840 年，ゴォ（1790-1853）によりやっと着工され，彼の死後はバリュ（1817-1855）が引き継ぎ，1857 年に完成，1865 年

5 月にパリ大司教ダルボワにより聖別された。塔の高は 69 米，内部の長さ 96 米，幅 38 米で，14 世紀のゴシック様式の拙劣な模倣作と酷評された。

55）église Notre-Dame-des-Champs：第 6 区のモンパルナス大通り 91 番地にある。地下鉄のヴァヴァン駅の近くでコレージュ・スタニスラフが横にある。この地区の教区教会として建立された 300 人収容の小さな教会。落成の聖別式は 1852 年 2 月 15 日で，当時はノートル - ダム - デ - プランシュ教会と呼ばれていたのは，木造の故だったろうか。現在の教会は 1867 年に新築されたもので，建築家はジナン（1825-1898），様式は擬ロマネスク様式，正面はジュール・トマの浅浮彫りで飾られている。

56）église Saint-Pierre de Montrouge：第 14 区のヴィクトール・バック広場に面し，メーヌ大通りとジェネラル・ルクレルク大通りの交叉点に建っている。オスマンによるパリ美化計画の一端として建設が立案された教会の一つ。サンテ刑務所建設に当っていたヴォドルメール（1829-1914）に発注された。彼は 3 角形の敷地を考慮し，正面玄関の上に鐘楼をつけるという斬新な設計をした。ロマネスクとビザンチン様式の混合スタイルで，鐘楼の高さは 57 米だった。1870 年の少し前までに，この教会は鐘楼を除いてほとんど完成していた。

1870 年 10 月 4 日以降，パリ籠城の時，教会の身廊は野戦病院に，未完成の鐘楼は物見台に使用された。しかしこのために敵の砲兵隊の目標になり，被弾の危険を避けるため野戦病院も移動せざるを得なくなった。パリ・コミューヌの乱の時も看視塔として利用され，地下納骨堂は軍需品の倉庫となったため，ヴェルサイユ政府軍の攻撃目標にされ，鐘楼で捕られたコミューヌ軍の兵士 37 名が銃殺されている。1903 年に他の 2 つの塔が増築され，1923 年 2 月 8 日，デュボワ枢機卿が，大司教 2 名，司教 4 名を従えて，聖別式を挙行している。

57）pont d'Arcole：アルコル街の延長としてゲーヴル河岸とコルス河岸を，つまりシテ島と右岸の市庁舎前のグレーヴ広場を結ぶ橋。長さ 90 米，幅 20 米。1828 年に建造された橋は吊橋で，歩行者専用で有料だったが，1848 年にパリ市が買収してから無料になった。1855 年，115 萬フランで新造された橋は一つのアーチでセーヌ川を跨いでいる。

アルコルの名の由来は，1830 年 7 月 28 日，7 月革命の最中に，この橋上で三色旗を掲げ，市民たちを激励しつつ銃弾に倒れた青年が，自分の名はアルコルだ，忘れないでくれ！　と叫んで戦死した，という逸話にあると伝えられている。彼はおそらく，1796 年 11 月 15 日，イタリヤ遠征のナポレオンがアルフォンヌ河にかかるアルコレ橋を軍旗を手

にして最っ先かけて突進しオーストリー軍を破った勝利を想起していたものと思われる。青年の本名はジャン・フルニエと伝えられている。アルコル橋になる前，グレーヴ人道橋と呼ばれていた。1888 年に再度補強工事が施工され今日に至っている。

58）pont Saint-Michel：第 1 区と第 4 区，第 5 区と第 6 区，オルフェーヴル河岸とグラン - ゾ - ギュスタン河岸，パレ大通りとサン - ミシェル広場を結ぶ長さ 62 米，幅 30 米の橋。1387 年に着工，1387 年に完成した石橋で，プチ - ポン，プチ - ポン - ヌフなどとも呼ばれた。1408 年 1 月 30 日，流氷のため家もろともに流失した。この年の寒気は厳しく，インクがペン先で凍ったといわれる。1416 年再建工事開始，1424 年完成，サント - シャペルの後陣の南側に在った旧サン - ミシェル礼拝堂に因んで命名された。1547 年 12 月 9 日，船が衝突したため，17 軒の家と共に崩れ，1549 年に再建された木橋も 1616 年 1 月 30 日の洪水により流失，すぐに石材で再建され，両側に 32 軒づつの商店が建築された。これらの店は最終的に 1809 年に撤去される。1857 年に現在の橋が新造される。設計者はヴォードレー，工費は約 7.500 萬フランだった。

59）pont des Invalides：最初の橋はアーチ一つの吊橋で，1826 年の架橋，技師ナヴィエールの製作だった。しかし設計者の技術不足と地盤沈下のため，翌 27 年に新しい吊橋が 5 つのアーチに支えられて完成，人間は 5 サンチーム，馬は 10 サンチームの通行料が徴集された。1854 年，石橋に作り変えられ，中央の支柱に陸と海の勝利を示す 2 体の彫像が飾られたが，この像は現在の橋に現存している。この橋台を立ている時，昔の白鳥の小島 ile des Cygnes の上流地点の深さ 3 米の所から 9 世紀半ば頃にパリに来襲したヴァイキングの舟の一部が発見されている。しかしこの橋は期待に反してすぐに痛み崩壊の危険が見えたため，1878 年に新橋建造を開始，橋の完成まで上流に仮橋を架けた。所が 1879 年 1 月 3 日，凍結していたセーヌ川の氷が溶けて流れ出しこの仮橋を押し流してしまい，運の悪い事に溶けた氷塊と仮橋の断片が工事中の橋に激突し，今度は工事中の橋が崩壊し流失してしまった。工事は再開され，1880 年にやっと完成，12 月 20 日に渡り初めがあった。1956 年に張り出し部分をつくり歩道にして，橋の幅を拡張している。

60）Charles Garnier（1825-1898）：パリ・オペラ座の建築家として有名。1842 年美術学校に入学，48 年にローマ大賞を得てイタリヤ，ギリシャに留学，1853 年に帰国，第 5 区と第 6 区の建築技師に採用された。1860 年のオペラ座設計コンクールで彼のプランが採用され，それまで全く無名だった彼は一躍時の人になった。その後の 14 年間，彼はこの新しい歌劇場の完成に心血を注いだ。面積 14.000 平米，長さ 122 米，幅 101 米，高

さ 79 米の大劇場は，内部の豪華さ，外部の装飾の絢爛さで，第 2 帝政期の代表的記念建築物の一つとして評価されている。様式はネオ・バロック式と呼ばれた。その他，彼はモンテ・カルノのカジノなどで多くの作品を残し，1875 年には学士院会員になった。著書に『芸術随想』*A travers les arts*（1869）『劇場研究』*Etude sur théâtre*（1871）などがある。

61）ティエールの要塞群：エジプトの太守メフェメト・アリはオスマン帝国からシリヤを奪回，コンスタンチノープルを脅かしていた。これはフランスの軍事援助によりエジプト軍が近代化したお蔭であった。しかしイギリスはエジプトの勢力増大が東方における自国の国益を害う事態を招くとして，オーストリー，プロイセン，ロシヤに働きかけ，エジプト軍のシリヤ撤退とフランスの介入を阻止するための 4 箇国によるロンドン協定を締結した（1840.7.15.）。ヨーロッパで孤立に追いこまれたフランスは戦争の危機を痛感し，首都パリの防衛強化を急いだ。時の首相だったティエールは首都の 16 箇所に要塞を建設する計画を立案，1841 年 2 月 1 日，議会はこの案を承認し，建設工事が開始された。但しこの時は国王ルイ・フィリップの新英政策に反対したティエールは首相の座を追われ下野していた。要塞は当時の大砲の射程で隣接する要塞の間の距離をカバーできる間隔の地点に構築され，パリの周囲を防備するのに 16 箇所に要塞を構築する必要があったのである。1845 年に工事は完了するが，この要塞群の一帯の土地が新しくパリ市に編入され，1859 年以降の正式の市の境界になった。本文の以下の地名がそれである。

62）1864 年の刑法改正：これまで労働者の団結権は，刑法第 414，415，416 条で禁止されており，部分的だが労働関係を規制していた。自分たちの権利を　自覚した労働者側の要求と，彼らの好意を取り付けようと願っていたナポレオン 3 世の思惑が一致し，刑法の 3 箇條の改訂が実現した。エミール・オリヴィエ（1825-1913）はこの 3 箇條改訂の報告書を議会に提出し可決される（1864.5.25）。労働組合は認可されないが，現実にある組合には比較的寛容で，団結権は公認された。これはストライキを実行できる事を意味した。これ以後ストライキは全国規模で頻発し，1869 年春から普仏戦争勃発の 70 年夏に頂点に達したのである。

63）国際労働者協会 Association international des travailleurs：この協会の誕生も，ナポレオン 3 世の労働者を取りこもうとする配慮からである。1862 年ロンドンの万国博覧会に，政府は各職種の労働者 200 名をイギリス産業視察の目的で派遣した。彼らはそこでイギリスの労働者たちと交流し連帯感が生れたのである。こうしてパリでは一部のエ

リート労働者たちが「60 人宣言」を発表，政治的・社会的権利の平等を訴えた。この宣言は穏健な調子だが，労働者の自立を主張した画期的宣言だったのである。そしてこの年 1864 年 9 月 28 日，ロンドンで主としてフランスとイギリスの労働者であるが，ロシヤの圧政に決起したポーランドの労働者への支援を表明し，各国の労働者の団結を目的とした国際労働者協会，第 1 次インターナショナルが結成されたのである。

64）Eugène Pottier（1816-1887）：フランスの政治家，詩人。1848 年 2 月革命に参加，第 2 帝政に反対する。1867 年に製図に工房組合を創立し，第 1 次インターナショナルに参加する。パリ・コミューヌの時は，パリ 20 区共和派中央委員のメンバーとして奮戦，血の週間（1871.5.22.-28.）の後にイギリス，ついでアメリカに亡命，大赦令の後に帰国（1880），フランス労働結成に努力した。革命派の詩人として、プロレタリアートの戦いとコミューヌの歌を作詞した。『白色テロ』*La Terreur blanche*（1871.6.）『インターナショナル』*L'International*（1871.6.），『連盟兵運動』*Le Mouvement des fédérés*（1883.5.）『蜂起する人』*L'Insurgé*（1884）などがある。

65）Pierre Joseph Proudhon（1809-1865）：フランスの社会主義者。ブザンソンの貧家に生れ，奨学金を得て中学に学ぶがすぐに中退し生活のため植字工となり，印刷職人として国内をめぐり，1836 年に故郷のブザンソンに印刷工場を設立し文法書などを出版した。独学で得た彼の知識は混沌としておるが，彼の言によれば，聖書，アダム・スミス，ヘーゲルから最も影響を受けたという。1840 年に出版した『財産とは何か』*Qu'est-ce que la propriété* の中で「財産とは盗んだものだ」と断言し有名になった。しかし財産そのものを否定したのではなく，資本主義社会も否認するものでなかった。1846 年出版の彼の主著『経済的諸矛盾の体系，別題，貧困の哲学』*Système des Contradictions économiques, ou philosohie de la misére*（2 巻）でも私有財産と共産主義を攻撃している。しかし彼の主張はマルクスの『哲学の貧困』*Misère de la philosophie*（1847）に痛烈に批判され，そのため有名である。2 月革命により議員に選出され支配階級を攻撃し社会改革案を提出するが，共和派に参加せず個人で活動したのは，彼のプチブル的個人主義のなさしめる所とみられる。『革命の正義と教会の正義』*De la justice dans la Révolution et dans l'Eglise*（1858）で有罪判決を受けブリュッセルに亡命，62 年 9 月の大赦で帰国した。彼は社会問題の解決を国民相互の扶助に求め，また国家論においては無政府主義（アナーギズム）を唱道し以後の労働運動に大きな影響を与えた。

66）Karl Heinrich Marx（1818-1883）：ドイツの社会主義者，科学的社会主義即ち共

産主義の創始者。プロイセンのライン州トリールに生れた。父は新教徒に改宗したユダヤ人の弁護士で，比較的富裕な家庭であった。ボン，ベルリン両大学で，法学，歴史，哲学を学び，イエナ大学で学位を得る（1841）。教師を断念しジャーナリストになったのは，ライン州政府の反動的文教政策のためである。彼は急進的ブルジョワの反政府新聞『ライン新聞』*Die Rheinische Zeitung* に入社するためケルンに移転した。主筆となった彼は経済学の研究も必要な事を知った。1843 年に幼年時代からの友人でプロイセン貴族の娘 Jenny Von Westphalen（1814-1881）と結婚，政府により新聞が発行停止になっていた事もあり，パリに赴いた。これからフランスとの関係が始まる。終生の友人で共同研究者となるフリードリッヒ・エンゲルス（1820-1859）と再会した。『ドイツ・イデオロギー』*Die deutsche Ideologie*（1845-46），『共産党宣言』*Manifest der Kommunistischen Partei*（1848）などを発表した二人は，近代労働運動の理論的基盤を築き，マルクス主義を樹立した。第 1 次インターナショルにおけるマルクスの活動も，彼の『資本論』*Das Kapital*（1867-94）の完成にもエンゲルスの協力があって実現できたのである。マルクスは『哲学の貧困』（1847）を書きプルードンを批判，やがてドイツ古典哲学，イギリス古典経済学，フランス社会主義を融合昇華させ，哲学からは弁証法的唯物論，これを歴史と社会に適応した史的唯物論を確立する。前者により資本主義社会を解明するマルクス経済学が生れ，後者から労働者の階級闘争理論と戦術が樹立された。史的唯物論を歴史分析に応用した最も重要な作品は『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』*Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*（1852），『フランスにおける内乱』*Der Bürgerkrieg in Frankreich*（1871）である。マルクスはエンゲルスと共に国際労働運動の精神的・組織的・理論的指導者として大きな影響を与えた。

67）Jacques Victoer Albert, duc de Broglie（1821-1901）：父アシル（1785-1870）の引退（1851）の後をうけ，ブロイ公爵となった彼は外交官としてマドリッドやローマで勤務したが，1848 年の 2 月革命後に辞職，宗教史の研究に没頭（『4 世紀における教会とローマ帝国』*L'Eglise et l'empire romain au IVe siècle*）でアカデミー・フランセーズ会員に選任された（1862）。ユール県からオルレアン派の代議士として選出され（1871），駐英大使に任命される（1871-72）。共和派の領袖となったティエールに対抗，「道徳的秩序」派の政府副首相として（1873.5.25.-74.5.16.），軍の再編とバゼーヌ将軍の裁判とマクマオン大統領の 7 年独裁成立に努力した。しかしオルレアン派と正統王朝主義者の王党派の和解に失敗，王政復古運動は挫折した。「道徳的秩序」派第 2 次ブロイ内閣（1877.5.17.-

11.19.）は 10 月 14 日の下院選挙で共和派に大敗し退陣した。1885 年まで元老院議員を務めたが，その後政界から引退し歴史的著述に専念した。『フレデリック 2 世とマリ‐テレーズ』*Frédéric II et Marie-Thérèse*（1882），『モーリス・ド・サックス』*Maurice de Saxe*（1891）などの著書がある。

68）Pierre Antoine Berryer（1790-1868）：フランスの弁護士。正統王朝主義者でカトリック信者だったが，自己の主義信条にとらわれず，幾多の有名人を弁護した。国王に対する叛逆罪で告発されたミシェル・ネー将軍（1815 年 12 月 7 日に銃殺），ピエール・カンブロンヌ将軍（軍事法廷で無罪判決），教皇至上主義で告発されたラムネー（1826），7 月王政を非難したシャトーブリアン（1832），ブーローニュの蜂起きに失敗したルイ‐ナポレオン（1840）などはいずれも彼が弁護に当った。政治家としては正統王朝主義者のスポークスマンとして，1830 年以降議会で重きをなした。ルイ‐ナポレオンのクー・デタ（1851.12.2.）には断固反対した。『議会演説』*Discours parlementaires*（1872-74），『口頭弁論』*Plaidoyers*（1875-78）などの著作があり，1854 年アカデミー・フランセーズの会員に選出された。

69）1851 年 12 月 2 日のルイ‐ナポレオンのクー・デタに反対したユゴーは，労働者に変装し 12 月 11 日にパリを脱出，ブリュッセルに亡命した。1852 年 8 月 1 日にブリュッセルを立ち，ロンドンに 3 日宿泊し，8 月 5 日にジャージー島に到着，同 16 日，Marine-Terrace という家に居を定め，1855 年 10 月 30 日まで足掛け 3 年暮す。1855 年 10 月 31 日にガーンジー島へ移転，Hautevill-House という邸を購入し，この家で 1870 年まで過し，第 2 帝政の崩壊後の同年 9 月 5 日フランスに帰国した。19 年の亡命生活だった。

70）*Les Fleurs du mal*：ボードレール唯一の詩集は，1857 年 6 月 25 日にプーレ‐マラシ書店から出版されるが，「フィガロ」紙上でギュスターヴ・ブールダンが公序良俗に反した不道徳な作品だと非難（5.7.），続いて J.アバンも同様に批判した（7.12.）。7 月 6 日，裁判所はこの著書を差押え，著書と出版者を告訴する。8 月 20 日の判決は，罰金の他に作品 6 篇の削除を命じたものだった。ボードレールから『悪の華』を献呈されたユゴーは，「星のように光り輝く」Vos *Fleurs du Mal* rayonnent et éblouissent comme des étoiles.と絶賛している（1857.8.30.の手紙，E・C 版ユゴー全集第 10 巻，1280 頁）。

71）*Le Corsaire*：1823 年 2 月 11 日創刊の小新聞。演劇，文学，美術，風俗，モードの記事を専門としたが，特に文学とモードが主力。但し小新聞の常で，政治的には反政府

的で違法ジャーナリズムの雄だった。若手作家にデビューの場を提供，アルフォンス・カール，ジュール・サンドー，シャンフルーリらもここから巣立った。後に同種の新聞 *Satan* と合併，*le Corsaire-Satan* となったが，1848 年以降は，自由派から正統王朝派に移行，1852 年に廃刊になった。

72）*La Presse*：エミール・ド・ジラルダン（1806-1881）により，1836 年 7 月 1 日に創刊された日刊紙。それまでの新聞の半額の年間購読料 40 フランという廉価と，連載小説という新機軸で，新聞の歴史に革命を惹起し，忽ち多くの読者を獲得し，有力新聞の仲間入りをした。各種の広告を掲載しその収入で定価を引き下げ，更に読者を増加させ，またより多くの広告を掲載し，増収をはかり更に定価を下げるという，近代的な新聞経営の形態を完成させた。この大衆迎合的手法に怒ったアルマン・カレルがジラルダンと論争の末にピストルでの決闘に発展，カレルは重傷を負って死亡する悲劇さえ起こった（1836.7.24）。バルザック，デュマ・ペール，ゴーチェ，ユゴーら当時の人気作家たちも寄稿して紙面を賑わした。ジラルダンの引退後も続き，1928 年まで存続した。

73）*Lorenzacio*：1834 年 7 月に発表されたミュッセの 5 幕散文史劇。上演を期待していないこの作品は 36 場に展開される。ミュッセがサンドと共にヴェネチアに向かったイタリヤ旅行の途中，1833 年冬にフィレンッエに滞在した時，この市の古記録を調べてメディチ家のアレクサンドル暗殺を知ったのがこの作品の渕源という。サンドも同じ題材で『1537 年の陰謀』*Une Conspiration en 1537* を書いていたが，この事をミュッセは最初は知らなかったらしい。二人の種本はフィレンッエの歴史家でメディチ家が勢力を揮っていた 16 世紀前半のこの都市の歴史を公正に記録した Bernadetto Varchi（1503-1565）の著書『フィレンッエ史』*Storia firorentia*（1721）である。従兄であるフィレンッエ公アレクサンドルを暗殺し，この町に自由を取り戻そうとするロレンゾ・ド・メディシスは，公爵に愛され信頼されるため，彼の放蕩仲間となり，人々から破廉恥な無頼漢と軽蔑されるが，最後に公爵暗殺に成功する。しかし懸賞金をつけられた彼も刺客により殺害される。腐敗した権力を打倒するため，心ならずも退廃の生活を送らざるを得なかった理想主義の青年の苦悩を描いたこの作品は，ロマン派演劇の自眉の傑作とされている。支配階級を憎悪し攻撃するこの戯曲は，政府にとっても好ましからざる著書であった。特に第 3 幕第 3 場で，暴君アレクサンドル打倒のために暗殺を決行しようとロレザッチョが熱弁を揮うシーンは，ナポレオン 3 世も不快だったのではなかろうか。

74）この一文は，ナポレオン 3 世歿落の過程を要約している。イタリヤへの援助はイ

タリヤ統一戦争への参戦と講和（1859.5.3.-7.11.），メキシコ介入はメキシコ独立反対しマキシミリアン皇帝擁立のための戦争（1862.4.16-1867.2.3.），これは完全な失敗でマキシミリアン皇帝を見殺しにし，フランスの威光を失墜させた。プロイセンへの宣戦布告（1870.7.19），ナポレオン皇帝敗北しスダンで降伏（1870.9.2.），帝政瘞され第3共和政成立（1870.9.4.）に至る。

75）*Napoléon le petit*：ロンドンで印刷され，ブリュッセルでエッッエル書店から，1852年8月5日に出版されたユゴーのナポレオン3世に対する弾劾パンフレット。全8章から成り，ナポレオン3世の政治を完膚無きまでに批判し攻撃し罵倒している。特に12月2日のクー・デタとそれが惹起した残虐行為が厳しく糾弾されている。地下に眠る偉大なナポレオン1世は自分の甥の小人ナポレオンの愚行に痛恨の涙を流している，と詩人は断言する。このパンフレットはフランス国内では厳重な取締りの禁書に指定され、警察が厳しく取り締ったが，密かに国内に持ちこまれ，反政府の人々に愛読された。また各国語に訳され，全欧州で読まれた。「インク壷で大砲を破らん」とするユゴーの決意と情熱と闘争心の凝集した作品である。

76）Badinguet：1846年5月25日，ルイ-ナポレオンがハム要塞監獄から脱走した時に変装用の服を提供したといわれる石工。第2帝政時代，反政府派は皇帝に成り上った昔の叛乱分子の彼をこの綽名で呼んで軽蔑した。

（続　く）

（追　　記）

（1）参考図書などは，〔Ⅰ〕の巻末に掲載してあります。

（2）前稿〔XXIV〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p．3．上から 7 行目　　mystères

p．5．下から 5 行目　　ある人たち

p．8．上から 12 行目　　*Misère*

p．8．下から 2 行目　　彼らは

p．10．上から 2 行目　　Moulin

p. 10. 下から 10 行目　Champ
p. 14. 上から 3 行目　L'Empire
p. 14. 上から 7 行目　(得票 21 票)。
p. 16. 上から 2 行目　などを
p. 21. 上から 15 行目　Chaumière
p. 22. 上から 8 行目　*Scène de Bohème*
p. 25. 下から 11 行目　La Péri を
p. 35. 上から 9 行目　しまう

— 2007.8.29 —